

掲示板

2006年度 第1号(4月) 通巻第40号



ギャラリー展: 博物館を楽しもう「はしかけ・フィールドレポーター活動紹介」に参加して

フィールドレポーター担当 楠岡 泰

今年度も引続きフィールドレポーターの担当をさせていただくことになりました。よろしくお願いいたします。

3月21日から4月9日まで開催された琵琶湖博物館ギャラリー展: 博物館を楽しもう「はしかけ・フィールドレポーター活動紹介」にフィールドレポーターが参加しました。冬に実施した竹の利用法調査の結果およびレポーターさんが持ち寄った竹製品、レポータースタッフ手作りの竹製品などを展示しました。展示コーナーの中央にはテーブルを置き、手作りの竹製のおもちゃを展示したところ、これがとても子どもたちに好評で、いつもにぎわっていました。また、関連イベントとして竹細工教室を3回開きました。ご協力くださった皆様、ありがとうございました。

私自身が生まれ育った所には竹林など全くなく、子どものころも自分で竹とんぼなどの竹のおもちゃを作った経験はありませんでした。今回最も感動したのは、第1回の竹細工教室の折、和歌山県出身で大阪在住の男性が、お孫さんに次から次へといろいろな竹のおもちゃを作ってあげたことです。竹とんぼはもちろん、竹のブンブン(竹とんぼ状の板に2つ穴を開け、ひもを通し、ひもを両手で引っ張ると板が回転し、ブンブン音を出す)、竹の筒にササの葉を挟んだリード笛、篠竹に縦に割れ目を入れただけで大きな音がする笛など、あっという間に作ってしまわれました。子どものころ、徹底的に竹で遊んでいないと、「ああはいかない」と痛感しました。私など、今回の竹細工教室のために、レポータースタッフの皆さんに教えていただいたり、竹細工の本を見たりしましたが、にわか勉強ではたいして役にたたず、その年配の方に指導していただきました。



ちょっと前まで、竹は日常生活のあらゆる場面で使われ、子供にとっても格好の遊び道具でした。ところが現在では、竹製品はあまり使われなくなり、子供たちは竹を使っただけの遊びを忘れ、竹林は放置され荒れ果てています。何とか子供たちに竹との遊び方を知ってもらい、竹林の再生もできないかと思えます。

***** もくじ *****

表題	担当	頁	表題	担当	頁
* ギャラリー展に参加して	楠岡 泰	1	* 与謝蕪村もフィールドレポーター	多胡好武	12:13
* ギャラリー展スケッチ	桜島昭紘	2	* レッサーバンドが立っても	加固啓英	14
* 竹細工教室は大盛況	古谷善彦	3	* 百五十人のすごい仲間へ	加固啓英	15
* 竹利用法調査に際して	中川徳司	4:7	* フィールドレポーター交流会案内	FR スタッフ	16
* ナマズ救出大作戦	山犬の主人	8:9	* 予定表・あとがき		17
* 山で遭遇する危険動物	勝見政之	10:11	*		

ギャラリー展博物館を楽しもう

「はしかけ・フィールドレポーター活動紹介」の会場スケッチ

草津市 桜島 昭紘

3月21日～4月9日開催のギャラリー展でのフィールドレポーターコーナーの活動の様子を紹介します。

このギャラリー展は「はしかけ」14グループの日常の活動の成果展示コーナーと、「フィールドレポーター」の活動展示コーナー、そして会期中のイベントとして、フィールドレポーターが企画した「竹細工をつくってみませんか?」コーナーが生活実験工房で開催されました。それぞれの展示がお見えになった方々に身近に感じられる工夫がされていて、来場された方々の表情も楽しそうで、のんびりと見学しておられました。また、学校が春休みに入り多くの子供連れのお客様が来場されました。

フィールドレポーター活動報告のギャラリー展コーナーは、「竹の利用調査結果」を中心に、「夏のせみの調査」、「蝶の調査」、「タンポポ」のポスター展示をした。

特に調査がまとまったばかりの「竹の利用調査」は目的や調査結果を壁一杯にポスターを張りPRしました。またショーケースには皆さんのご協力で貸していただいた昔使用していた竹製品、最近の竹の飾り、竹のおもちゃをにぎやかに展示しました。

子供連れの家族の方は、お父さんが竹のおもちゃの遊び方を教えておられたり、ご年配のご夫婦は調査結果のポスターや製品の展示を懐かしそうお話をされながら見学しておられました。

見学におみえになった方々の様子を観察していると、展示している竹製品は昔から身近にあって生活に無くてはならないものだったのが、もう懐かしいものや珍しい物に変わり、作り方や利用の仕方も忘れられたものになっていると、感じられました。



表 題【竹細工教室は大盛況でした】

投稿日 【060412】

氏名 【草津市 古谷善彦】

「博物館を楽しもう～はしかけ・フィールドレポーター活動紹介～」のタイトルでギャラリー展示が3月21日（祝）から企画展示室で開催されました。

フィールドレポーターは『竹』をテーマとした展示と竹にこだわった関連イベントとして竹細工教室『竹細工を作ってみよう』を4月9日までの期間中の日曜日（3月26日、4月2日、9日）に生活実験工房で行いました。

毎回予想を超える来場者があり、予め準備した『竹』の作品にその殆どの人が興味を示されよう、大勢の人達に竹細工を楽しんで頂きました。

学校が春休みのこの時期、私たちが参加してくれることを期待していた子供たちがお父さんやお母さん、おじいちゃんやおばあちゃんと一緒にたくさん来てくれました。普段は係わることのない珍しい作業で竹ぶえ、竹とんぼ、竹ぽっくり、竹馬など、思い思いの製作に取り組み、中には我を忘れて熱心に竹細工にのめり込むお父さんもあって和やかな雰囲気工房でした。



そして完成した作品に何で鳴るの？ どうしたら、どうして飛ぶの？ と云った疑問や質問は子供とともに若いお父さんお母さんも同じでした。

特に2回目の4月2日は天候不良で午後は一時的に激しい雨が降りました。にもかかわらず開始時間前から工房前入れ替わり立ち代わり100人も外も作業テーブルは常に人をはじめ10名ほどのス鳴？でおおわらの賑わい大入りにスタッフもやり甲ました。



に待つ親子連れもあり、以後人にも及ぶ参加者で工房は中超満員、館FR担当の楠岡さタッフが対応にうれしい悲に終始しました。予想以上の斐あり・・・の笑みがこぼれ

最近、新聞などで報道されているように、放置され荒れ放題になっている竹やぶの管理や効率的な処理の方法として竹製品への再利用が話題になっています。私たちフィールドレポーターは今回の博物館の企画展示をフルに活用し、再利用を先取りするようなタイミングで、竹の採集、工具の持ち寄り、竹細工の指導、そして『竹細工を作ってみよう』を行いました。遊びを通して多くの人々が竹の環境や現状を知りそして何かを考えるきっかけになればこの催しは大変意義深いものだったと思っています。

表 題 【「竹の利用法調査」に際して】

投稿日 【060116】

高島市マキノ町 中川徳司

稲は神様が人間に与えた最高の贈り物と言われるように、米をとった残りの藁からもみ殻にいたるまで捨てることのない植物ですが、竹も又私達の身の回りを豊かにし最後は土に還る最上の植物であると思います。私(諸輪 16 年生)の子供の頃は今のようにプラスチックや金属類の氾濫している社会ではありませんでした。竹は今のように農地や山林を侵食することなく人々によって管理され私達の集落の古文書にも「みだりに竹木を伐るべからず」と戒めています。コンバインが普及するまで田園の稲架に使う竹を切る竹藪が大切にされ、裕福な農家しか竹藪を持っていませんでした。人々は竹の種類、特性、切り方、時期等色々の知識を持っていました。

戦後、昭和 30 年代だったと思うのですが、竹の合板で作った盆や皿が売り出されたことがあります、いつの間にか姿を消しました。

又、葎よしや茅かやで葺いていたくずやの屋根の竹が永年の煙で黒褐色に変色した煤竹も以前は民芸品、扇骨、建材等に使われていましたが、古いくずやの家もずいぶん少なくなりましたので、もう材料としてなくなっているかもしれません。

私達の集落は昔から半農半漁で生計を立て、知内川の両岸は竹で覆われていましたが、河川改修で竹藪もなくなり、日常の生活から竹を使う事もなくなりました。

土木： 現在は河川の護岸に蛇籠を 8 番線位の鉄網で作っていますが、昭和 20 年代蛇籠は恐らく真竹だったと思うのですが、竹で編んで中に栗石を詰めていました。土方と呼ばれた人達は担い棒の前と後に竹製の平らなカゴ(パイスケと呼んでいた)で土砂を運搬していました。

建材： 最近では減りましたが、在来工法の家では巾 3cm 程の割竹を縦横に組んで土壁をつける壁下地に竹を沢山使っています。(壁下地)

昭和 20 年～30 年代には木の板代りに、竹を割って 4～5 本の板状にして縦横に組んで板状にしたものを壁に貼り付けたり、塀代わりに使っていました(しょうけ垣)。

くずやの家で居が一階と二階の境に(木造家屋のささらの部分)500 円玉位の大きさの竹を組んで敷いてその上にむしろ等を敷いて下へゴミが落ちないようにしていました(おそらく板が高かったからではと思います)。

くずやの葎や茅を葺く時には 500 円玉位の太さの竹を使い縄でしっかり締め付けて葺いていました。藁葺きが多い私達の集落も同じです。

戦前の建物の解体に行き気が付いたのですが、瓦葺きの家でも材木の節約でしょうか、瓦つりに竹の割ったのが沢山使っていました。

昭和 20 年代はまだプラスチックの樋がなく、トタンも高いというので真竹を二つに割って中の節を取りのぞき樋に使っていました。樋を「とゆ竹」という人もいました。又、割り方があって、適当に割っては真っ二つに割れないので、割れ具合を見て割っていました((割口を真中に、上に割あげたり、ひっくり返して割あげたり)。

これも昭和 20 年代か 30 年前半だと思いますが、マキノスキー場の売店では新井紋のに使うのか谷川や湧水から建物の中に竹のパイプで水を引き込んでいました（竹の節を抜きジョイントの部分は枕状の木材に穴をあけて竹をつないでいました）。

比較的遅くまで暖炉裏を使っていたマキノ町剣熊竹ではいろりの炎が天井まで燃え上がらないように 2 ~ 3 m 上に竹で編んだ簀が張ってありました。

農業 戦前養蚕の盛んだった頃には三尺（90 cm）四方位の大きさだったと思うのですが、竹を割って平らな皿上の骨組みを作った「さんざ」が使われていました。

茶摘みをする家もずい分減りましたが、今でも茶摘み籠は使われています。

私の家では飯米は稲架に干した天然乾燥のハサガケ米を食べていますが、コンバインの普及するまでは全部の農家が稲架を組んで、稲を干していました。たつと呼ばれる縦の木と竹を数段横に組んだのを稲架といいます。

川の水を田の地面の高さまで引き上げるには、川の中に「ゆぼね」とよばれる横木それに添える竹の棒に水を漏らさないむしろやコモ、今ではブニール等の当て物が必要ですが、川床に竹をしっかり打って水圧で竹が流されないようにします。

昭和 20 年代農薬が十分にいき渡らない時代、圃場には沢山のいなごがいました。そのいなごを捕えて一日置くと糞を出すので、翌日熱湯をかけてから干して、子供のおやつやニワトリの餌にしました。そのいなごを捕らえて袋に入れるのには竹の筒を袋にくくりつけ、左手の親指でその口を抑えてイナゴを入れる時だけ親指をはずしました。

昭和 20 年代には稲苗を入れる苗籠を竹でできていました。

現在でも川の土手で切ってきた竹を使い、トマト、キウリ、豆等の垣、苗の日除けの支柱、スイカの鳥除け等に使い、田のおどし等にも使います。

菓子 団子の串

竹の皮 竹の子からはがした生の竹の皮を二つ折りにして、中に梅干のシソ入れて角から吸った（すっぱいだけだった）。

丁稚羊かん小豆あんに小麦粉を混ぜて竹の皮に包み一時間ほど蒸して作る

漁業 知内川を横切る鮎のヤナ、鱒のヤナ、人通川の鱒の、琵琶湖の鮎の 当に竹は大量に使われていました。新川には竹の簀でニゴイやハスを入れるイケス(生け簀)が作ってあります。

20 年代に漁師の人に鰻の筒をあげる船にのせてもらいました。径 5 ~ 6 cm、長さ 1 m 程の竹の筒(節をとってある)を 3 本程束ねてくくったものを連続して湖底に沈めておき、ある程度日数が経ってうなぎの入った頃を見計って引き上げる漁です(プラスチックの筒と違ってウナギが滑り落ちないと聞きました)。

知内には 20 年代から 30 年代にかけて二統の地曳き網がありました。獲れた小鮎を入れる丸カゴ(10 貫目位入る)船に据える大カゴ(100 貫目位入る)や網曳きをした人が小鮎を労賃としてもらう時に入れる目カゴ等大小様々な籠がありました。目カゴについては竹の外側の皮で作ったのが丈夫で、内側の身で作ったのは弱いので安物でした。

又地曳網で捕えた小鮎以外の荒物と呼ばれる鯉等の魚は生かしておくのにどうびんと呼ばれるフタ付の直径 2 尺位、高さ 3 尺位のビクに入れられました。

竹を細く割ったので作ったもんどり、えびを捕るタツベも竹製でした。

どじょうすくいのどんじょけも竹製でした。

竹を交叉させて網を張ったオイモテ（オイサデ）、カラスの羽根をつけて小鮎を追いつまむ竿も竹製。

小さい川に堰を作り流れを一箇所に集中させて遡上する鮎をすくい取るハネダモの夕モの外周も竹製。

四ツ手網の手も竹製。

産卵に遡上する鱒（ひめます）やニゴイを突くヤスの柄

捕えた（ハス）を浜で焼にする串

小鮎を保存する為に焼串として残すのに使う串

小鮎の飴煮きを進物用に使うのに20年代には竹の身の部分を使った折箱が暫く使われていました（そげが刺りそうでコワかった）。

やれをする道具の綿糸、針、竹の針（名前忘れた）等を入れる道具入れの筒。

釣をするときの竿。

玩具 凧の骨組み

竹とんぼ

杉鉄砲 普通の竹ではなく、篠竹と言われる「しのべ」で作り小さく細いので杉の花の蕾をこめて打つ

紙鉄砲 しのべ出作り新聞紙等を濡らせて塊にしてこめて打つ

水鉄砲 筒の先端にあけた小さな穴から筒の仲の水に圧力をかけ水を飛ばす

石鉄砲 竹の筒の上下に穴を開け竹を割って物差し状の竹の反動を利用して筒の中に入れた石玉を飛ばす

竹スキー 竹を真っ二つに割り、背竹くらいの長さに切り、先端から15cm～20cm位の所を火にあぶって曲げ、先端を削り三角形にする。少し後に板と自転車のタイヤを切って丸く取り付けて、ながぐつが入るようにする。尚半割りの竹は真中に割れ目をいれ平らにする。

竹馬 竹馬の棒として竹を使う

模型飛行機 翼の形を作るヒゴとして使う

貯金箱 竹の節から節の外側を切り上部に二本鋸の切り口を作り叩いて入れ口を作る

笛 吹き口と指で押さえる穴をあけたがうまく鳴らなかった

こぎっちょ 500円玉位の太さの竹の節を中心の30cm位の長さに切りH形に横面の竹の皮をはぎ取り、上部にかじき等をひっかけるしかけをつくり、糸か紐で箸をくくりつけ下のすき間に立てかけ、それに引っかけるように棒をのばして、棒の先に餌を撒いて小鳥が餌にさそわったらしかけがはずれてカジキが小鳥の上に落ちる装置です。

家事用品 しょうけん ざる 洗った米を入れて水を切る

はちまん直径10cm、長さ20cmのびくで畑に種を落す種入れにする

竹ぼうき竹の枝の葉を落したものを束ねて竹の柄をつける

こまざらい 熊手

番傘、蛇の目、うちわ、扇子、セイロウの簀、洗濯竿、菅笠の骨組

おしめ干直径2尺、高さ3尺位の目の荒い竹の籠をうつむけ、こたつを入れて

おしめをのせて乾燥させる(あぶりこと言った)

すし桶(のなれずしの塩漬用) 漬物桶、味噌桶、醤油樽、角樽、肥桶等のなき輪、たらい、洗面桶のなき輪、毛糸編の棒、物差し

こうもり傘の握り棒 竹の根を使った

火吹き竹かまどの火を勢いよく燃やす為2尺程の長さの竹の中の節を抜き先端の節の先に小さな穴をあけて息を吹きかける竹

しんし針着物の洗い張りに使った(ヒゴの先に針のついた細長い棒)

竹の皮 魚の煮付けが焦げないように竹の皮を敷いて煮付けた。

煮上がった竹の皮の両端をつまんで上げると形がくずれない

祭礼 今津町さんやれ祭り 川上祭りには背の高いまっすぐな竹に飾りをつけて使う
安曇川町田中祭り 田中祭りには青竹の先端を斜めに切り中に酒を入れて見物客等にふるまう

マキノ町知内お初穂祭り 竹の葉の束で湯を散らせて神主が行う

マキノ町知内お祈祷さん 安養寺のお寺で竹の節を利用した盃で酒を酌み交わす

地鎮祭や浜開き 司法に芯まで揃った細めの竹を四方に立て縄で囲い幣で飾って無事を祈祷する

門松

マキノ町知内 唐崎神社の石橋の前には真竹三本を組んだ車止めが置いてある唐崎神社川裾まつりには祭礼の準備が整うと行事が竹の杖を持って神主を迎えに行く日吉神社や唐崎神社の神石には竹で囲いがしてある

結婚式 荷受の時には新婦の方は500円玉位の太さの3尺位の長さの竹の上部に半紙を水引きでしっかりくりつけた杖を二本持って行く。荷を送った仲人と荷送人が帰った後、新郎の家では二度と使うことのないように割った。

葬式 今では全部火葬になった集落(知内)ですが、10年程前の土葬の時には「華作り」と言って、葬式に使う色々の品を作りましたので、竹も結構使いました。野辺の送りに使う米粉を練って500円玉より少し大きめのだんご(押さえて)を2ヶ串の両端に差し、順々に積み上げ三宝の上にのせる。

天蓋を吊るす棒

旗をつける棒

たいまつ材料の一部

送り人の杖等

埋葬した墓を荒らされないように割り竹の両端を尖らせて盛り土の上に何本も差し込む

その他 太平洋戦争の末期、艦船に乗り組む軍人の救命胴衣が不足して、竹の筒を代用にしたと聞いています

竹には切り旬と言って、切る時期があり(12月から1月頃)、暖かくなってから切ると虫が入って翌年には折れる位弱くなる。

以上

4年前第 i8 号にナマズの投稿をしたが、わが家のすぐ近くにあるその用水路と堰は昨年12月から改修工事が始まった。夏まではその堰には2、3匹のナマズがいたのだが、どういう訳か秋からはナマズだけが姿を消していた。そこから約250m上流にもう一つ堰がある。その堰の前後に数匹のナマズがいた。こちらは以前から変わる事なく姿が見られた。毎晩の犬の散歩コースに組み込んで、ポイントではライトで照らして確認しているのだ。そして下流側は12月半ばから水路の流れは止まった。上流側は1月の半ばから工事が始まった。流れの止まった川は徐々に水が減り、水たまりと化してゆき、閉じ込められた魚は、小が中の糧となり、中は大や水鳥の糧となり、やがて小魚の影も消え、水鳥の姿も減って来た。工事が始まりコンクリートが打たれ始めると、降る雨によりその毒は水たまりへと注ぐ。水草は徐々に枯れ腐敗臭が漂い始める。1月末になるとナマズの姿が見えなくなった。工事の作業員にでも捕まえられたのかと思っていたら、今月の初めに最初の腐乱死骸を見つけたが他にナマズの姿は見られなかった。今までどこに隠れていたのか。

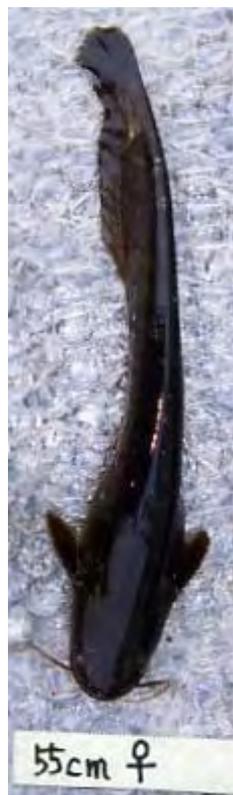
水草の影以外に隠れる場所はないから探せば他にもいるのではと思い、仕事が休みの日曜日に捕獲することにした。でも晴れたら山登りに行くし...。そして迎えた5日の朝...、雪模様のため山行きは中止。休みの日は朝から犬の散歩。ナマズの棲み処は凍っていた。山に行かない日は午後から暮を打ちに行くのでこの日は中止。そして10日(金)の晩、ナマズ3匹を発見。この日は山には雪が見えたので11日(祝)の山行きはなし。土曜日で暮もないので本決まりになった。そして朝の犬の散歩の後、捕獲するためのたも網の修繕から始めた。次に水槽代わりのプラスチックコンテナを物置から引っ張り出した。

定規とカメラを持って、ゴム長を履いて...いざ出陣。現場に着くとたも網とコンテナを持って水路に降り、少し水を張る。たちまちのうちに4匹を捕獲。すぐあがりコンテナにひしめくナマズをパチリ。そして何げなく水たまりに目をやるともう1匹いるではないか。網を持って再度降り捕獲。車に積み込み、上にビニールをかけ運転席に。助手席には相棒のリキ(犬)がお待ちかね。さてどこに行こうか...。水が豊富な川で車からコンテナを下ろしすぐにその場で放流できる場所は...。重いコンテナを持って歩くのはいやだし...。この水路は祇王井川から家棟川に流れ込むので、男洲市野田(旧中主町)に行くことにした。国道477号線を家棟川まで行くと、野田橋の端の土手に車をおけるスペースがあった。ここだと橋の上から簡単に放流できる。リキは車止めのポールにつなぐ。コンテナを下ろし、1匹ずつビニールの上に置き、体長を測って写真を撮り放流。腹が膨れているのが だろうと勝手に解釈すると、47cm

2匹、55cm 各1匹、57cm 1匹の計5匹を放流。捕獲したときから横になっていた55cm はもとより...5匹とも水を得た魚のごとく(ではなくそのものだ。)放流と同時に元気に泳いだ。水たまりの中では食事も運動もさぞかし不自由だったことだろう。かくしてナマズ救出大作戦は完了した。この水路では黄色のナマズはまだ発見されそいない。そして改修工事が終わってもいったん壊滅状態になったこの生態系からゲンジボタルは発生するだろうか。

(野洲市山犬の主人)さんの「なまず救出大作戦」の写真原稿を1ページに編集させていただきました。

編集担当 椋島



【山で遭遇する危険な動物(クマ・スズメバチ・マムシ・ヤマカガシ・ヒル)に関する調査・報告】 スズメバチについて

去年の10月に、中学の陸上部の先輩と霊仙山に登った帰り道に、小屋の軒先に大きなスズメバチの巣があるのを見つけたので、デジカメの望遠で撮影しました(右の写真)。スズメバチが巣にじっと止まっていたので、恐くて、これ以上は近づけませんでした。



(引用文献:朽木生き物ふれあいの里センター展示室の展示)から
スズメバチ(キイロスズメバチ)には要注意?

『スズメバチの中でもキイロスズメバチは、一番事故の多い種類で、近年、特に増加の傾向にあります。7月頃から家の軒先や崖、橋の下に巣を作り、12月頃まで活動します。ピーク時には、働きバチが400~1,400匹。働きバチの仕事の一つは、巣に蓄えた蜜や幼虫を守ること。近くを通っただけでも、巣を守るために攻撃して来ます。』

巣を見つけたら、近付かないようにしてくださいね。スズメバチは攻撃性がかなり強く、黒いものに襲いかかる習性があるため、野外では黒っぽい服は避けた方が無難です。』

スズメバチの毒液の構造

『酸性毒腺の酸性の毒が、毒囊(のう)を通して、アルカリ毒腺のアルカリ性の毒と毒針の手前で混合され、これが、毒針から人を含む動物に注入されます。』

(引用文献:「スズメバチの逆襲 中村雅雄著 新日本出版社 1992年10月25日初版発行」) から

(引用文献:「スズメバチの生活 生態に光をあてて 有賀文章著 大日本図書株式会社 1990年8月10日初版第1刷発行」 から)

もしスズメバチに刺されたら(ハチ毒アレルギー)

『動物の体内にハチ毒(異物)が入ると、ハチ毒も体内に入って来た異物ですから、それをやっつけようとする働きがあり、これをむずかしい言葉で「抗原抗体(こうげんこうたい)反応」と言います。人にも、もちろんこの働きがあるので、私達は健康でいられます。』

このように身体を外からの異質物(異物)から守るために、この異質物を異質と認識し、無毒化もしくは排泄等しようとする生体反応が、「抗原抗体反応」です。

一般的には身体に悪影響を及ぼすような反応を、アレルギー・過敏症と呼んでいます。ここでの異質物が抗原・異質であると認識するものが、抗体です。よく抗原と抗体は鍵と鍵穴に例えられ、完全に一致した時に、この抗原抗体反応が起きます。

ハチ毒には、マムシやハブのような血清は未だできていません。そして、スズメバチに刺されたらアンモニア(おしっこ)というのは、まず駄目です。

ハチの毒液は非常に水に溶けやすい(水溶性)ので、まず、刺された箇所をつまむようにして、しぼり出したり、流水で洗い流し、毒液が少しでも体内に入るのを防ぎます。ただし、部位によってはこうした処置ができないことがあります。

その後、濡れタオルなどを当て、氷嚢(ひょうのう)などで刺された所を「冷やし」ながら、「抗ヒスタミン剤含有のステロイド軟膏」(虫さされの薬)を塗り、全身症状のひどい時は「抗ヒスタミン剤」を服用します。

こうした応急処置をした後、できるだけ早く医療施設へ急ぎます。特に腫れや痛み以外の症状が出たことのある人は、直ぐ病院に行くようにしたいものです。

アナフィラキシー・ショックに陥ると、全身の震え、嘔吐、下痢、ショック症状、血圧の急激な低下、意識不明などの症状が表れ、死亡する例もあります。このようにハチに刺されると症状がひどくなる人を、アレルギー体質(または過敏症)と言っています。ハチ毒アレルギーの人は極めて少ないのですが、こういう人がハチに刺されると、大変なことになります。』

私も、薬剤師の端くれですので、スズメバチに刺された場合のことを考えて、山に行く時は、抗ヒスタミン剤と、抗ヒスタミン剤含有のステロイド軟膏は必携だと思っています。

抗ヒスタミン剤は、アレルギー症状が起こる原因となる化学伝達物質(ヒスタミンなど)の働きを抑えて、痒み等を和らげる作用(抗アレルギー作用)のある薬です。いろいろな種類の抗ヒスタミン剤が市販されています。

また、スズメバチなどに刺されると、そこが赤く腫れて、痛くなったり痒くなったりしますが、ステロイド(副腎皮質ホルモン)軟膏は、このような炎症を鎮める薬(抗炎症剤)です。「リンデロン(商品名)」などが有名です。

次回は、マムシについて、報告します。

以 上

表題 与謝蕪村もフィールドレポーター

投稿日 [18.3.26]

名前 [大津市 多胡 好武]

時は1777年(蕪村62歳)今から約230年前、場所は長柄川(後の中津川)が淀川と合流する毛馬の堰堤あたり。

当時のことを蕪村は「幼童之時春色清和の日ニワ必友どちと此堤上ニのぼりて遊び候。水ニ八上下ノ船アリ、堤ニ八往来ノ客アリ」と記している。

(現在この堰堤は明治18年の大洪水を期に大改修が行われ川とともに無い。)

さて、蕪村のフィールドレポーターとしての報告とは蕪村幼い頃この堤上で目にした田舎娘が藪入りをするストーリーでつくった、俳詩「春風馬堤曲」18首のうちの11首めの詩で

「たんぽゝ花咲り、三々五々五々は黄に三々は白し 記得す(覚えている)
去年此路よりす」

の詩句で特に230年前の大阪で黄色タンポポ5に対し白色タンポポ3の割合で咲いていたという箇所である。



現在の大阪タンポポ事情はいかかなものか？

最近の調査、2府5県で最も白花タンポポが少ないのは大阪である。

私の幼い頃(大津市)はタンポポは黄色と思っていた。しかし最近の大津、草津界限では白花タンポポはあたりまえ、農道などに一面白花が咲き誇っている場所も見受けられる。

江戸時代の大阪は上方の台所として賑わい、川を挟んで商家が建ち並んでいた様は想像がつく。全国から集まる荷にはその土地の草花の種も着いてきたのであろう。

のどかな風景が目に浮かぶ。

この時代黄、白のタンポポが混在したことをこの俳詩は報告している。

(写真上、関西タンポポ。下、白花たんぽぽ。H18.3.25 草津にて撮影)

ちなみに西洋タンポポが入ってきたのは明治、札幌農学校創立時、教師ブルックス氏が北米より蔬菜用として種子を取り寄せ栽培したものが野生化したとのこと。

蕪村 FR の報告としてもうひとつ面白い句がある。

「鷺ぬれて 鶴に日の照る時雨哉」

この当時、鷺と鶴が混在して餌を啄んでいたのか？興味深い句である。

付録

蕪村の俳句から近江の地名がある句を一部紹介。

むき蜷石山のさくら散りにけり

湖や堅田わたりを春の水

秋たまたまつゝじ花咲志賀の里

三井寺に緞子（どんす）の夜着や後の月

しのゝめや露の近江の麻畠（アサ畑）

採蓴（ジュンサイのこと）をうたう彦根の 夫（さうふ：いなか者）哉

いなづまや堅田泊まりの宵の空

身にしむや横川のきぬをすます時（洗濯する）

瀬田降て志賀の夕日や江鮭（あめのうを）

甲賀衆のしのびの賭けや夜半の秋

秋寒し籐太が鎧（かぶら）ひゞく時

三井の山上より三上山を望て

以上 蕪村俳句集より抜粋

湖へ富士をもどすやさつき雨

考靈天皇 5 年、近江の地裂けて湖水となり、富士山を現出するという伝説

表 題[レッサーパンダが立っても...]

投稿日[051125]

名 前 [彦根市 加 固 啓英]

「起て、万国のレッサーパンダ!」との檄が飛んだかどうかは知りませんが、このところ一斉に立ち上がるレッサーパンダをマスコミが取り上げましたが...

これって今に始まった事ではなく、今まで話題にもならず、見向かれなかつただけの事だと思います。

私にはレッサーパンダより相棒犬トラの方が不思議に思えます。

相棒犬トラは寂しがりやで、私が立ち去ろうとすると、反動を付けるわけでもなくフワリと立ち上がり、私の衣服の襟や袖を咥えたまま静かに座り込み、私を引き留めます。結果は服が破れては困るので、仕方がなくしばし「犬と戯る」状態に引き込まれてしまうのです。レッサーパンダが立っても私にはあまり不思議に思えない、犬が立つほうが不思議だと云う理由は、そめ歩き方と生活の行動パターン、習性からです。

レッサーパンダだけでなくプレイリ - ドッグやマーモット、その他の地栗鼠の仲間、ウサギ目、等の良く立ち上がり、辺りを警戒する哺乳動物のほとんどは人間(但しバレリーナを除く)と同じ様に蹠(くるぶし)の下の踵(かかと)から先の足全体を地面に付けて立っています。

ミーアキャット(マンゲース科)などはつま先で立ってはいますが、ちょっとずるをして「奥の手」ならぬ「奥の足」の尻尾でつかい棒をしています。

馬が竿立ちになり、横倒しになる事故は良く有りますが、それは人間で云えば爪に当たる蹄で立っているですから不安定で当然です。

子供向けの図鑑では「レッサーパンダは樹上で採餌する」とされています。

木に登るには先ず立ち上がる必要があります。手のひら、足のひらでしっかりと幹につかまる必要もあります。

だが犬には立たなければならない必然性や生活パターンが見当たらないのです。

二足歩行や自転車乗りで CM のギャラが入るのは買い主であって本人に(?本犬に)では無いのです。

近年、あまり聞かないようですが、哺乳類の歩き方、足の地面への着き方の呼び方に、蹄行(蹄:人の爪に当たる)、指行(肉球等:つま先)、庶行(足の平)、があります。

人同様に足の平全体を地面に着けて歩く動物はサル類、クマ類、ゾウ、等の少数派だと思います。(以前に、中国の日本大使館への駆け込み事件の女の子、ハンミちゃんでしたか?の数枚の動物の絵をテレビで見ましたが、それぞれの足の違いを見事に正確に書き分けているのに関心しました。)

レッサーパンダは指行でありながら足の平全体を地面に着けて立っている様に見えます。

『別件』 ロードキルの調査(案)につき「分かりやすい見分け方」を文書化中です。

このままでは繁雑・大仕事となり、贅肉を落としての縮小調整中。

請うご期待。

標 題 「百五十人のすごい仲間たちへ」

投稿日 [060223]

名 前 [彦根市 加固 啓英]

琵琶湖博物館の約 150 名のフィールドレポーターはすごい人的資源だと思います。各人各様の学力・知識・職能・資格・趣味...これらを相互補填しあいベクトルが揃えられれば怖い物なしの、何でも出来るすごい能力の集団になりそうです。

しかし現在は水の様に淡い「君子の交わり」で実力が充分には発揮されていない様に思われます。これをもっと密な、交流の容易なものにしませんか？

そこで、自己申告、手前味噌 OK、の「得意分野の登録制」を提唱します。

これを元に質問や助言、共同作業が進められるファイルを作るのです。

その内には「どの分野なら誰々さんの出番」となると思います。

又、月に数回フィールドレポータースタッフが集まり、メンバーに月に一回会報を送付するのですから、なかなかタイムリーな情報交換は望めません。

個人情報上の問題が無い範囲で希望者間の e-mai1 での連絡網を作りませんか？

昨年暮れにナベヅル一羽が愛知川の下流、湖岸遺路の橋の上流側直近に舞い込み、しばらく住み着いていました。多賀町立博物館と打ち合わせ、結果は悪戯対策の箝口令でした。今年、ナベヅルが飛び去った後で e - mai1 で話題にしましたところ、すぐに応答あり、その後の消息を知らせて頂きました。

このような広範囲の調査・情報収集にも約 150 名のフィールドレポーターの力を積極的、敏速に活用すべきだとおもいます。

進め方によっては「お祖父さんの時計」程度のムーブメントには成りそうです。

フィールドレポーター交流会のご案内

定例の交流会を下記の通り開催いたします。

2005 年度に調査をした結果を報告し、フィールドレポーター相互の意見や情報を交換したいと思います。

調査の発表は「フィールドレポーターだより」を見るより、来てみて聞いた方がより詳しく知る事ができます。

今後の活動に生かすためにも是非お越しください。

記

と き:平成 18 年 5 月 28 日(日) 午後 1 時半～午後 5 時

ところ:琵琶湖博物館 生活実験工房

1) あいさつ

琵琶湖博物館 FR 担当 楠岡泰さん 13:30～13:40

2) 調査報告

1. エドヒガン調査 13:40～14:20

学芸員さんからのコメント

2. 夏のセミ調査 14:20～15:00

学芸員さんからのコメント

3. 竹の利用法調査 15:10～15:50

学芸員さんからのコメント

4) 全体の質疑応答

5) 交流会終了後、反省会をかねて懇親会を行いますのでご望の方はご参加ください

フィールド・レポーター 5月・6月・7月予定

次のとおり計画しておりますので皆さんご予定、ご参加お願いいたします。
 なお、稀に予定が変更になる場合がありますのでご了承ください。

日 時	内 容	場 所
5月06日(土)13:30～17:00	定例会	博物館交流室
5月20日(土)13:30～17:00	定例会	博物館交流室
5月28日(日)13:30～17:00	交流会('05年度活動報告)	博物館生活実験工房室
6月03日(土)13:30～17:00	定例会	博物館交流室
6月17日(土)10:00～17:00	定例会(掲示板発行)	博物館交流室
7月01日(土)13:30～17:00	定例会	博物館交流室

(おことわり；上表の博物館とは琵琶湖博物館のことです。)

〈フィールド・レポーター・スタッフから編集を終えて〉

今年も県内の満開の桜ははかなくも、もう足早に過ぎようとしています。昨年のエドヒガンの調査のおかげで桜を見ている目がそれ以前に比べて、細かく観察する目になっているのを密かに喜んでいるのは私だけでしょうか？

昨年調べた桜を今年も観察に行ってきました、エドヒガンだろうと言われた桜の木は今年も満開の花を咲かせていました。皆さんはいかがだったでしょうか？新たにエドヒガンを見つけられた方もおいでになるのではないのでしょうか？

その時は掲示板の方に投稿お願いします。次回掲示板は「今年の桜観察」特集ができれば楽しいですね。

あしひきの山桜花日並べてかく咲きたらばいと恋ひめやも

(万葉集より山部赤人)

今回も学芸員紹介の原稿準備ができませんでした、次回には載せたいと思います。
 また、皆さんのご投稿もお待ちしております。(担当 FRS 椛島昭紘)



フィールドレポーター 掲示板

2006年度 第2号(7月) 通巻第41号

自然な田んぼ

フィールドレポーター担当 楠岡 泰



朽木いきものふれあいの里主催の観察会「田んぼの生きもの～自然農法の田んぼで自然観察～」に講師として招かれました。無農薬、不耕起(耕さない)、冬季湛水(冬も水を張ったまま)の田んぼということで、私も興味津々でした。しかし、下見に行き行って困ってしまいました。私が得意とするミジンコなどのプランクトンがほとんどいないのです。これまでのフィールドレポーターや田んぼのはしかけグループの調査により、ホウネンエビやカイエビ類など、いわゆる田んぼのエビ類が朽木に分布しないのは分かっておりました。でも、普通は少なくとも、ミジンコの仲間、特にカイミジンコ類でしたら、田んぼにうじゃうじゃいるはず。これでは私の出る幕はありません。

こうした田んぼの違いはプランクトンだけではありません。オタマジャクシが1平方メートルに数十匹もいます。ヤゴやゲンゴロウの仲間、イモリもたくさんいます。畦を歩けばカエルが一斉に飛び出し、モリアオガエルの卵塊が田んぼ脇の木からぶらさがっています。さらに、畦にはヘビもたくさんいて、数筆の田んぼを見て回ると10匹以上のヘビに出くわしました。これまで、こんなにたくさんヘビがいる場所は初めてです。ヘビが多いということはそれだけ餌となるカエルなどが多く、自然が豊かな証拠です。

お昼にこの田んぼの脇の水路で取れたドジョウの味噌汁と、この田んぼのお米で作ったおにぎりをいただきました。とてもおいしく、本来田んぼはお米以外のさまざまな恵みを与えてくれる場所だだと痛感しました。小魚やヤゴなど多様な生き物がいる田んぼではミジンコ類は格好の餌であり、その数は低く抑えられています。私が普通と思っていたミジンコうじゃうじゃの田んぼは、実は異常な田んぼだったのでしょうか。

モリアオガエル



捕まえた シルビ 黒色型
ヤマガシ 黒色型

***** もくじ *****

表題	担当	頁	表題	担当	頁
* 自然な田んぼ	楠岡 泰	1	* 山で遭遇する危険動物	勝見政之	10:11
* 学芸員紹介	椋島昭紘	2:3	* 初回竹トンボの作り方	加固啓英	12:13
* オオヨシキリ1回目調査結果	多胡好武	4:5	* 饗庭の地区植物HP案内	堀野善彦	14:15
* 多すぎるオオヨシキリ	加固啓英	6	* FR制度を皆で盛上げよう	加固啓英	16
* 湖西自然探訪記	古谷善彦	7	* FR交流会(5/28)報告	古谷善彦	17
* 竹取物語	多胡好武	8:9	* 予定表・あとがき		18



西村 知記 さん (林学専攻)

草津市 椋島昭紘

今年4月の移動で琵琶湖博物館に着任され、里山体験教室ご担当の西村さんを、質問コーナーご担当の日(5月31日)にお時間を拝借して1時間ほどお話を伺いましたのでご紹介いたします。

林学を専攻されたきっかけは

育ちは京都の伏見、近くに伏見稲荷の森があり、子供の頃からミヤマクワガタを取ったりして遊んでいた。小さい頃から自然に関することが好きだったそうです。

そして、大学受験の頃('87年春)、知床の国立公園内の国有林伐採問題をニュース報道で見ました。その報道で見た映像は、林野庁や国有林の職員が大きなミズナラの木をチェーンソーで伐採しようとするのに対して、木を切っほしくない自然保護団体の人たちが自らの体とともに、鎖を木に巻き付けることで、体を張って伐採を止めようとしている状況でした。

いったい何が起きているのか？ その時点では何が起きているのか判らず、関心を持ったのが、後から考えればきっかけにもなった、ということでした。

質問の趣旨をはなれますが、この時の伐採事情について教えていただきました。

林野庁の言い分では、目的は「過熟齢木(老木)を伐採し森林を蘇らせる(若返らせる)ための健康維持のため」と「ミズナラは日本では需要がないが、家具材のオーク材としてヨーロッパに売れる。」ということで、わざわざヘリコプターで集材しても割りに合ったのでしょう。しかしこの時期('87年頃)は林学的な見方(森林の健康維持:過熟齢木は除去すべき)は主流ではありませんでした。先のニュースで見たというマスコミ報道も、林野庁に対して批判的な論調でした。主流は生態学的な見方で、「価値ある自然環境をそのままの状態に残すこと」がよいと思われていたように記憶しています。私自身の当時の考えもそうでした。

つまり、生態学的な見方とは、老木や倒木や立ち枯れの木まで放置して、自然のサイクル(時間)で、光が差しこみまた倒木を養分に植物が育ち、森が生き返るという時間を大事にしようという考え方です。そしてそれは多様な空間を提供するということになります。

このように両方の主張があり、主流(一般的なマスコミの論調)は時代によって交互に揺れ動いていると思います。例えば今起きているナラ枯れの現象を林学者は「過熟齢木が原因」と言っていて、今はこちらが「主流」の考えになっています。しかし先に挙げたように過熟齢木が悪いばかりとはいえない。立ち枯れや倒木は洞ができることで、クマやフクロウの棲家にもなる。今フクロウは洞がなくなって営巣する場所が少なくなっているといわれている。

「琵琶湖博物館に来て、こういう風にいろいろな面があるということを伝えて行くところに役目があるのかなという気がしています。」と話されました。

「林学は実学が主体の学問で、大学は林業県の高知でしたから実学が中心で、木を高く売るにはどうするかというのを学び、学生当時は違和感がありましたが、いろいろな考え方があることを知ったという点で林学を学んだのは良かった。」とも。

琵琶湖博物館でのお仕事

この4月に初着任されたばかりで、今回お邪魔した質問コーナーも初心者ということでした。

- (1) 里山体験教室を担当されています。5月27日、7月22日、9月23日、12月9日の4回開催です。里山体験教室の場所が今年から、日野町から野洲市大篠原に変更になりました。事前準備には、はしかけ(里山の会)の方と下見、危険箇所の確認をしたりしています。ここはアカマツの林で松枯れの後放置されていて、入るのが危険な状態です。これから里山を作っていくという体験になり、これまでの美しいコナラの林でカブトムシなどを楽しむ里山とは少し違うかも知れない。アカマツ林は過去に人の利用が多く、燃料に利用されてきて、植林もされてきたが、利用がなくなると、植えたままで放置して荒れたり、植林されずに過剰な利用で禿山になっているところもあります。例えば信楽焼きはアカマツでしか良い焼き物はできないと言われ、火力が強く燃料に利用されてきました。そこで里山体験教室では、利用してこそ里山と考えますから、燃料、肥料、材料、食料などの利用を考えることを意識して、里山を作っていくことを参加者の方にも意識してもらい、順々に楽しんでもらうと考えています。と抱負を伺いました。

- (2) 博物館での研究テーマは「野生動物と人とのかかわりについて」です。

明治時代に大型の野生動物が激減する時期があって、防除の研究が忘れ去られた。

大昔の獣害について、百人一首に「秋の田の刈穂の庵の苫を荒みわが衣手は露に濡れつつ」とありますが、これはイノシシやシカ害から守るため、寝ずの番小屋があったということです。また、鳴子やシシおどしも防除方法でした。現在も防除方法はいくつもありますが、なかなか成果があがっていないと思っています。それは積極的に防除を考えていないから、というのが本当ではないか、また、人間の感覚での防除方法では成果が上がりにくいことや、都会の人と獣害を受けている人では感覚がちがうなど、こういうところを研究テーマになさっているそうです。

森林センター兼務

森林センターは、今年から県の小学生の森林学習を引き受け、森林体験学習を行うことがミッションになっている。全県を4人で分担して森林体験学習を担当し、西村さんは東近江地域の学校を担当されるとのことです。

今年4月に移動される前は5年間、東近江の地域振興局の森林整備課にいて、森林所有者の方や都会の方に森林の大切さを伝えるとか、小学校の森林体験学習の担当をしておられたそうです。

小学生、中学生への森林指導のご経験豊富で、森のお兄さんと慕われておられるようです。

ご趣味について

「仕事と区別が付き難いと、と言われますが」と言うことで、「自然観察(木の実や野草のつまみ食いも含め)をしたり、山歩き(低い山をゆっくり歩く)が好きです。また、土山でNPO活動をしています。「かもしかの会関西」の活動に参加、シカやカモシカの食害防除の活動をとおして食害問題について取り組んでいます。」とご紹介いただきました。

今年6月に3歳になられるお子様がおります、若々しい西村さんをご紹介いたしました。

「オオヨシキリ」さえずり調査 第1回調査報告

記事 FRS 多胡 好武

6月15日、第1回オオヨシキリの飛来調査が終了いたしました。

調査票は 28名 83件の回収となりました。(内博物館ギャラリー展での報告1名1件)

ご協力ありがとうございます。

今回、第2回としてオオヨシキリの飛去調査票を同封いたしました。

引き続き調査報告をお願いいたします。

なお今回の飛来調査の集計結果は別紙の地図に反映しています。参考にしてください。



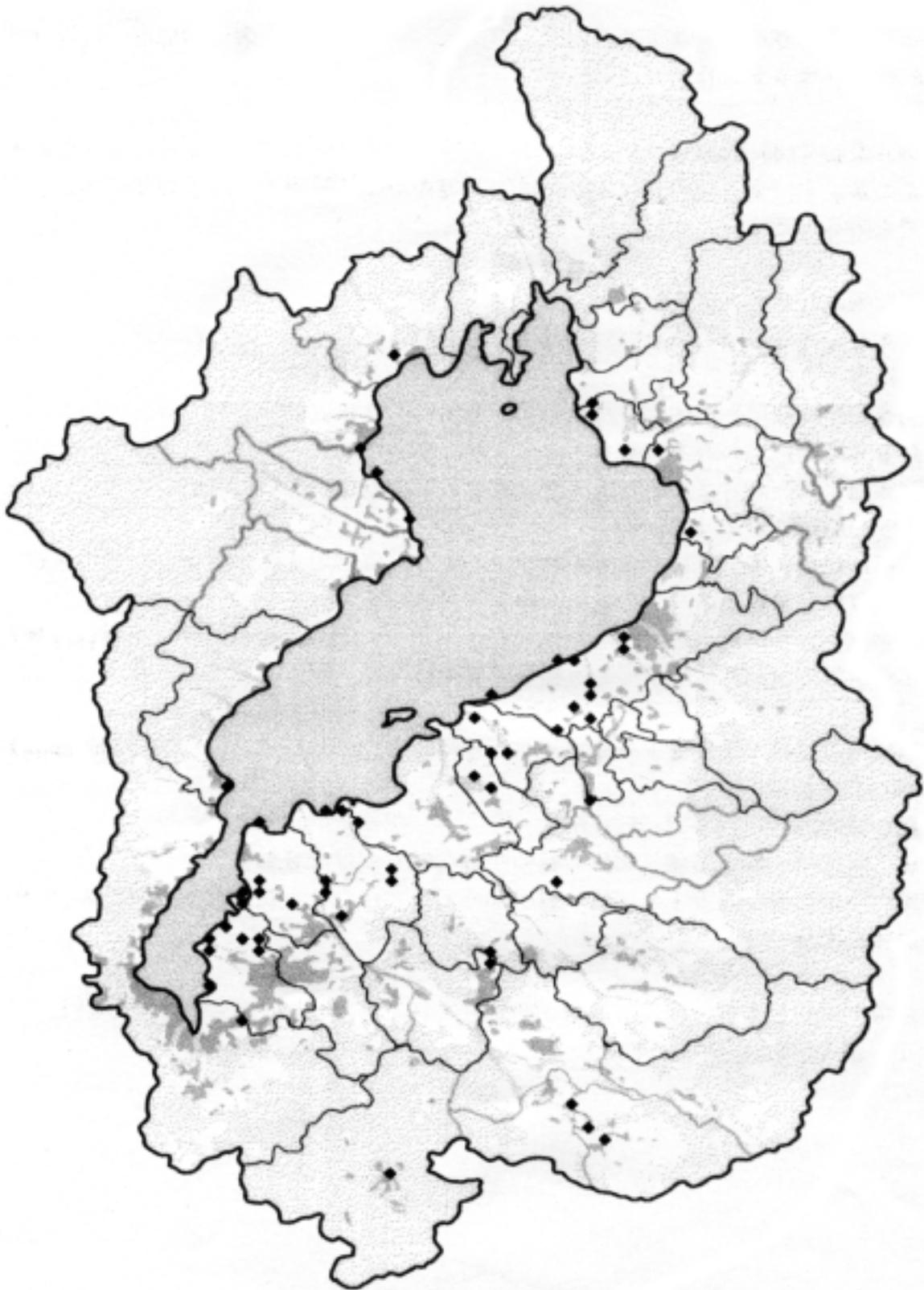
また今回、ギャラリー展でも鳥類学担当学芸員の亀田佳代子さんの協力で、オオヨシキリ調査速報コーナーを設けていただきオオヨシキリの鳴き声や、飛来地など来館者にアピールできました。

(左写真・・・ギャラリー展に掲示された地図にオオヨシキリの確認された場所を赤表示したもの)

なお、オオヨシキリ調査パネルは引続き水族企画展のトピックコーナーに展示、ご来館の折は是非ご覧下さい)

〔フィールドレポーターの皆様へ〕

今回、第1回調査報告では湖西、湖北地区および湖東、湖南の内陸部の調査表が少ないようです。第2回目の調査報告では新たなポイントが増えることを期待します。



- * 投稿の書式にしましたが、内容を検討して頂ければ、文書の取り扱いは F・レポータースタッフの判断におまかせします。

表 題 [多すぎるオオヨシキリ]

名 前 (彦根市 加 固 啓英)

投稿日 [060530]

私の目の届く(30 5236-61XX)では、少し家を離れるとやたらにオオヨシキリの囀りが聞こえて来ます。その場所・個体数、は一々調査票に記載するには手が廻らないほど何処にでも居るのです。

以下に気の付いたことを述べます

1. オオヨシキリとヨシの結びつきは強く、囀りの聞こえる付近に行けば、必ずヨシの植生に出会う。
2. 調査開始時期に一個体だった狭いヨシ原でも、今は数個体が競い合っている。かなり過密に思われる。囀りの声も大きくなった。
3. 数年前より、高さ 2m 以上の盛り土がされ、付近に水環境の無いところでもヨシが生えていればヨシキリが居着く。

採餌は昆虫、等の様にてであるから、テリトリー宣言の意味は餌場としての水辺への執着よりは営巣場所のヨシの植生の確保か？

4. オオヨシキリは河川敷のヤナギ類等の中高木の梢でも、根元にヨシが有れば囀る。
5. 私を避けて飛びさる空中でも、警戒の声ではなく、囀りの声であった。

- * 愛知川右岸の、栗見橋下 湖岸遺路 琵琶湖岸(30 5236-6150 ~ 29 5236-6059) の例を上げます。

May/25/2006 7:19 ~ 8:57 快晴、

対岸、東近江・能登川側 : 個体の数の明確な囀りだけで 3 個体。

右岸、彦根市側 : 同上 19 個体。過密部分では、川沿いの長さおよそ 12m 幅 4m に 5 個体を視認。

- * 日時・天候・位置・環境と植生・個体数・特記事項、の一覧表として送付しても良いでしょうか？

【湖西自然探訪記】

【060625】

【草津市 古谷 善彦】

6月8日に近畿地方は梅雨に入ったもようと所謂、入梅宣言があったものの、その後もお天気続きで梅雨の感覚はなかったが、例年この時期に一度は湖西方面へ出かけており今年は遅まきながらやっと20日の実行となった。

目的は、「田んぼの生き物調査」のエビの発見とフィールドレポーターの今年度第1回調査の期限は終了したが「オオヨシキリ」の声を聴くことである。

国道161号線は車の交通量は極端に少なく一時は前方、後方とも車の姿が見えずスピードは出し放題であるが万一、取り締まりに遭おうものなら折角の爽快な気分がぶち壊しになるしゴールドカードに傷が付く。そう考えると意外と慎重になるものでアクセルは控えめだったが今津の日置前まで1時間で到着、暑い日差しの中、梅原、三谷、酒波、桂、大沼、中庄そしてマキノを巡った。

三谷では細い小川に魚が敏感に泳いでいた。段差の落ち込みと覆いかぶさった草で特定は出来なかったが外来魚ではないことは間違いない。もう水を抜いて中干しが始まっている。残念ながらエビは見当たらず、例年アカハラのいるところに今年は見かけることが出来なかった。

酒波の集落の入り口は駐車場の列が続いていた、そういえばカントリーエレベーターのある酒波口に告別式の表示があったが、この辺りでは選択できると聞いていたが未だ土葬の慣習もあるのだろうかと思ってみたり。

途中で車を止め、車を止め、田んぼを覗いてみるもののエビがいそうな雰囲気はまったく無くぼんやりと水面を眺めながらいなくて当然と思えるような感覚になった。一方1匹見つければどんなに嬉しい!!!か?とも。

貫川内湖ではあちこちでオオヨシキリの鳴き声が聴けた。今回のオオヨシキリ調査では湖西の回答が少ないようなので、第2回調査では出来れば抜けているところを廻って見たいと思っはいるが???

JR近江中庄駅をはさんで広い範囲の田んぼを調べていたが今回、琵琶湖側の田んぼのほとんどが麦か休耕田になっていた。

ここからマキノ高原まで車で10分あまり。メタセコイヤが青々と空に覆いかぶさっていたのに圧倒、圧巻だった。集落手前の道の両側は田んぼであるがここは覗きにくいところが多く道の片側の田んぼは水がきれい過ぎる。

マキノスキー場入り口に温泉「さらさ」がある、温泉には入らなかったが併設のレストランでコーヒーセットを注文、早くも山に掛かった夕日を愛でながら、車のエアコンにも後押しされた暑い一日を終えることにした。

これといった成果は得られないままの探訪だったが、まあいいっか!!

表 題

『竹取物語』

投稿日 〔平成18年5月20日〕

名前 〔大津市 多胡 好武〕

かぐや姫、桃太郎、浦島太郎などの童話は誰もが知っている物語だと思いますが、さてこの童話を何時、どのように知ったかとなるとはきりとした記憶がありません。

今回、フィールドレポーターの調査で「竹」を取りあげたのを機に「竹取物語」について今一度記憶をよみがえらせて見たいと思います。

紫式部は源氏物語の絵合の巻で『竹取物語』を「物語の出で来はじめの祖（おや）」と評し、時代は672年、壬申の乱の後天武天皇のころと推測されています。

竹を刈って生計をたてていた翁が、あるとき竹藪の中に光り輝く1本の竹を発見する。その中には三寸ほどのかわいらしい少女がいた。不思議に思った翁はその子を家に連れ帰り面倒を見る。これ以来翁が竹を切ると黄金が出てきて家は裕福になってゆく。

少女は竹に似て成育が早く、かぐや姫の名を与えられると、三月のうちに美しい女性に成長する。

多くの人が姫を見に翁の家を訪れる。とりわけ色好みで知られる5人の皇子と貴族が、なんとか姫と結婚しようとおしかける。

姫は彼らに対しひどく困難な課題を突きつける。5人はさまざまな工夫を凝らして課題を解決する振りを見せたりするが、全員が挫折する。

最後に若い天皇が姫を宮中に招こうとするが、彼もまた拒まれる。

あるときかぐや姫は翁に、自分は月の生まれで、罪を犯して地上に流されてきた身であると告白する。

彼女が月に戻ると知った天皇は多くの軍勢でそれを阻止しようとするが天人の前にどうすることも出来ない。

月に戻るかぐや姫は不死の妙薬を天皇に渡すよう託し、泣きながら翁の家を去り、月へと戻っていく。

かぐや姫 : 今はとて天の羽衣きるおりぞ君をあはれと思ひいでける
妙薬を受けた天皇は、二度と姫に会えない以上、そんな薬がなんの役に立とうという歌を詠み、それを駿河の山の頂で燃やすように命ずる。

天皇 : 逢うことも涙にうかぶ我身には死なぬくすりも何にかはせむ
以後、この山は「ふし」の山、富士山と呼ばれる。
ざっとこれが『竹取物語』のあらすじです。



この物語の中心はなんと言っても5人の皇子と貴族が、かぐや姫から難題をつきつけられ、解決に四苦八苦する有様でしょう。

ここにその登場人物と、その実在名、かぐや姫からつきつけられた課題と結果を一覧にしてみました。

詳細は - 岩波文庫 - 「竹取物語」 定価300円 参照

登場人物	実在名	課題 と 結果
石つくりの御子	石作皇子	佛の御石の鉢をとりてたまえ 3年後、天竺まで石の鉢を取りに行ってきたと、山寺の食事を供える鉢に墨を塗って持っていくと、蛍ほどの光もないと捨ててしまう。
くらもちの皇子	藤原不比等	東の海、蓬莱山の銀を根とし、金を茎とし 白き玉を実とした木の一枝を給はらん 職人を集め秘密裏に玉の枝を作らせ、五百日の航海のすえ蓬莱山にたどり着き・・・と苦勞話をしている時、工賃をもらっていない職人が庭先に訪れ嘘がバレる。
右大臣あべのみむらじ	安倍御主人	唐土にある火鼠のかはぎぬを給へ 職人を通じて天竺にあるという皮衣を注文する。瑠璃の箱に入った金青の皮で毛の先から黄金の光を放っている。得意になって姫に届けるが火を近づけると皮はいとも簡単に燃え尽き贋物と判明する。
大納言大伴のみゆき	大伴御行	龍の頸(くび)に五色に光る玉あり、それを取りて給へ 配下の者がだれも探そうとしないので自ら南海へ航海にでるが難破、明石の浜に戻され終わる。
中納言いそのかみのまるたり	石上麻呂	燕の持たる子安のかひひとつとりて給へ 険しい場所の燕の巣を探し当てやっとの思い出巢中の物を んだ瞬間落下し、大怪我をする。それがもとで中納言は死んでしまう。

登場人物と実在の人物を一致させるような人名を用いていることはその時代の反体制勢力をうかがわせるとの解説がありますが、皆さんはどのように判断されるでしょうか？

以上

【山で遭遇する危険な動物に関する調査・報告】 マムシ・ヤマカガシについて

山では、クマの出没とともに、マムシに咬まれるのが一番の恐怖です。また去年、朽木の蛇谷(じゃだに)ヶ峰に登った時に、登山口に「ヤマカガシに注意！」と書いてある看板が立っていたので、ヤマカガシも危険な動物だと認識し、調査することにしました。両者とも毒蛇なので、主に「毒性」という観点から、必要箇所を引用しました。

【マムシに関する情報】

引用文献:【日本動物大百科(5 両生類・爬虫類・軟骨魚類)(101 頁～102 頁)】(平凡社)(日高敏隆 監修)から

『 悪役の代表ニホンマムシは、本土における最もよく知られた毒蛇として知られている。嫌われがちな蛇の中でも、とりわけ悪役にされやすいマムシだが、実際は意外におとなしい動物で、マムシに咬まれるのも、人の側の不注意や捕まえようとするためであることが多い。

毒量は少ないが、毒性は強い。奥歯の根元に毒腺を持つため、深く咬まれると危険である(死亡例もある)。上あごに長い管(くだ)状の毒牙があり、先細りになった先端の前部に、毒の出口がある。

マムシが持っている毒量は75～150mgで、乾燥重量では15～30mgになる。この毒をマウスに使用すると、350～750頭を殺すことができる。

もちろん咬んだ時に出る毒は、持っている毒の一部であり、その量は咬み方によっても大きく変わる。

マムシの毒の強さは、ハブをかなり大きく上回る(一説には、その毒の強さはハブの10倍)のだが、体が小さいために、注入される毒量はかなり少ない。

マムシの毒は出血毒であり、おもに血小板に作用してこれを破壊する性質があるため、局所に出血や腫脹が起こるが、毒量が少ないとそれだけで終わってしまう。

しかし、注入された毒量が多くなると、咬まれてから2～3日経過してから急性腎不全を起こすことがあり、手当が遅れると死亡する。正確な統計はないが、現在の致死率は1%くらいと推定される。死亡は、治療血清(マムシ抗毒素血清)によって防げるので、受傷後早い時期に、治療血清を使う必要がある。』

マムシに咬まれた知人から聞いた話によりますと、マムシに咬まれると、かなり痛いようです。マムシに咬まれて救急車などで病院に運ばれ、血清注射を打ってもらった人の話はよく聞きました。死んだと言う話はあまり聞いたことがありません。

山でマムシに咬まれたら、その場でできる応急手当は、ポイズンリムーバーがあれば、それで毒を吸い出すことぐらいしかない、とっていました。またナイフかハサミで、咬まれた所(傷口)を切開して、血液と共に毒を体外に排出¹⁰ :考えていたのですが、このような素人療法は素人には危険なので、よくないようです。咬まれた所を水で洗い、とにかく急いで病院に行っ

て手当てを受ける必要があります。

上記引用文献には、『現在の致死率は1%くらいと推定される』と書いてあるので、咬まれても直ぐに死ぬ訳ではないことが分かり、少しは安心しました。

【ヤマカガシに関する情報】

引用文献：(図説・なぜヘビには足がないか 恐竜からツチノコマで) 128～130頁 松井孝爾著 1990年9月20日 第1刷発行

『 ヤマカガシは、アオダイショウ・シマヘビとともに、日本本土で最もよく見かけるヘビである。

ヤマカガシは、毒腺が奥歯にあるため、毒蛇であることはあまり知られていなかったが、1972年に中学生が咬まれて死亡する事故が起きてから、毒蛇として危険視されるようになって来た。

その後、1984年にも死亡事故が起きている。こちらも被害者は中学生で、どちらの事故もヘビを捕まえようとして無造作に手を出して咬まれている。ヤマカガシは本来、おとなしいヘビなので、手を出したりしない限り咬まれることはない。

奥歯の根元に毒腺を持つため、深く噛まれると危険(死亡例もある)である。毒は出血毒であるが、おもに血小板に作用してこれを破壊する性質があるため、クサリヘビ類の出血毒とは違い、激しい痛みや腫れはあまり起こらない。

しかし、咬まれてから20～30分後ぐらいから、血液の中で化学反応が起こり、血小板が分解されて行く。そのため、全身の血液が凝固能力を失ってしまい、全身に及ぶ皮下出血、歯茎からの出血、内臓出血、腎機能障害、血便、血尿などが起こり、最悪の場合は脳出血が起こる。

ひと昔前まで、ヤマカガシには血清がないと言われていましたが、現在は日本蛇族学術研究所で試作品が作られている他、厚生省でも制作しています。』

次回は、ヒルについて、報告します。

以上

標 題 「初回・竹トンボの作り方」

提出日 [060501]

氏 名 [彦根市 加国 啓英]

琵琶湖博物館のイベントの「竹トンボ作り」6 流れで、皆様を「竹トンボ、オタク・ワ - ルド」へ招待したく、以下に文書化します。

とにかく 2 個は作るつもりで取り掛かって頂ければ面白さに嵌まると思います。

自分の手で物を作る際に得られるスキルや知識の広がり、物事を考える習慣が、書物、映像、キーボードをたたいて得た、表面的で浅薄な知識に比べて、どれほど奥深いかを実感して頂きたいのです。

* 普通に使われていた道具等の物の名前が、いつの間にか仮名書きとなり、本来の漢字が消滅しかかっているのは寂しい限りです。そこで、以下は余り難しくない漢字は出来るだけ使用し、括弧内にルビに当たる平仮名を記入することとします。

§ 工作道具

1. 鋸(のこぎり)二鋸齒(のこば)の細か目のもの。

2. 小刀: × 薄い刃を折りながら使うオルファ・カッターナイフは不可 6

オルファ・クラフトナイフ S 型(品番 26B)がお奨めです。

(私の購入時には、コメリで 220 円程度、アヤハディオで 160 円程度)

利点: 刃が左利き・右利き、の両方に使える。刃に厚みがあり、鉛筆を削る時の要領で刃の棟(むね = 刀剣の名所 ; などころ = 部分、「殺しはせぬわ! 峰打ちでござる」は多分、明治以降の講談本の広めた誤り)を親指で押す削り方が出来る。

手首をひねって竹などを割ることが出来る。

オルファ・カッターナイフの様に・折れた刃先で怪我をしたり、折れた刃先の行方がわからなくなる心配が無い。

刃先の出し入れが確實・容易に出来、使用しない時の素早く安全な収納が出来る。

3. ドリルとドリル・ビット : ドリル・ビットはシャフトに使用する籤(ひご)より僅かに細めを使用する。(軸の上端を僅かに削って取り付ける。)

ドリルに代えて細い錐(きり)でも良い。

4. 板ガラスの破片 : 昔の子供たちは知っていた事なのですが、厚み部分の角を立てて削ると効率よく滑らかに削れます。

5. #100 程度のサンドペーパーの併用も効果あり。

§ 材料

1. 竹材 : × あまり肉薄のものは不可。

長さ 11 cm 幅 2.5 cm 程度にサイズに揃える。直径 10 cm 程の竹の筒を縦に 12 等分すると量産し易い。

(良く飛ぶ物を作るには、長さにやや難しい問題あり。後述。)

2. 籤(ひご): (91 cm × 10 本 100 円)又は焼き烏用の焼き串(一束 100 円)、

何れも百円均一ショップ価格

3. 接着剤 : 1. ゲル・タイプのシアノアクリレート(アロンアルファーに代表される瞬間接着剤の、流れにくい、染み込みにくい物)
§ § 注意 : 接着面の微量な水分で硬化・接着する。これが指の皮膚等に付くと二本の指の皮膚が離れなくなったりする。一アセトンを染ませたティッシュペーパーで拭き落とせる。
2. セメダイン C(溶剤揮発型の酢酸セルロース接着剤)
3. 二液型エポキシ接着剤

§ · § 上記の 3 種とも、試作では良い結果が得られましたが、4 月 9 日の本番では、上記の 1. 2. 及び木工用ボンド(酢酸ビニルエマルジョン)の全てが不十分な結果であった。セメダイン C について e-mai1 でメ - カ - に問い合わせたが、配合の変更は無いとのことでした。後日検証したところ、比の竹材の乾燥が不十分だった為の硬化不良だったと思われます。

竹材の乾燥は電子レンジで 30 秒「チン」で OK でした。

§ § 先ず最初に、「良く飛ぶ竹トンボ」の絶対条件を挙げます。

終始一貫、これを追求して下さい。多くの点で最良の手本は「飛鳥」と「航空機(ヘリコプター、飛行機、グライダー)」です。

1. 回転翼の断面形状。(飛行機の翼断面が手本)
2. バランス。「重心」と「中心(軸の取り付け位置)」を一致させること。
3. 軸の取り付け方。自由回転の描く円の中心から垂直に、「ぶれ」の無いように堅く取り付ける。(出鱈目な作りでも「軸の無い竹トンボ」は良く飛びます。)
4. 軽量化。ゴマ一粒分の余分な重さでも削り落とすこと。色を塗れば、その分だけ飛行性能は落ちる。特に中心付近の贅肉を削ぎおとす事。
5. 滑らかさ。表面に凹凸があれば層流剥離が起き(飛行機なら失速)、揚力が得られない。

「たかが竹トンボ」ごときで話を引っ張って申し訳ありませんが...

以下、次号に続きます。

表 題 「饗庭地区の植物」のホームページ案内

投稿日 06430

名 前 高島市 堀野 善博

饗庭地区とは

琵琶湖西岸にある高島市新旭町の饗庭地区は、琵琶湖西岸と里山の間隔が 1.5K mm と狭く、湖岸(岡浜)、平地、里山(日爪、北谷)に生育する多様な生物が筍崇できる地域である。

日爪北谷の植物調査

平成 16 年 4 月～11 月の毎週土曜日午前 9 時に観察グループ 5 名が集合し、開花・結実している植物を合計 31 回調査し、その結果を「新旭町北谷の植物」としてまとめた結果、多様な植物が豊富に生息していることが分かった。

観察した植物の種名は植物図鑑で調べ、それでも不明のものは琵琶湖博物館の村瀬忠義先生に標本を送って同定を依頼した。視察した植物はその場で撮影し、帰宅してからフロッピーに記録した。その数は 219 枚になった。

平成 18 年の調査

平成 18 年の 3 月から 11 月まで毎月第 2 同曜同 9 時に集合して、琵琶湖岸の岡浜の植物調査と日爪北谷の植物調査をする。

初心の方にも分かるように観察した植物を葉、白色の花、黄色の花、赤紫色の花、その他の色の花、果実に分けて記録する。

帰宅して、記録した植物を区分別に分け、それぞれの植物の写真と解説を記録したフロッピーを抽出してホームページの準備を終了する。

パソコンに詳しい桑原靖さんに依頼して『饗庭地区の植物』のホームページとして発信する。

「饗庭地区の植物観察グループ」のメンバー

堀野善博 堀内晴雄 桑原靖 山口好美 木原茂喜

「饗庭地区の植物」

ホームページアドレス : <http://yoshihiro-horino.web.infseek.co.jp/>

高島市「饗庭地区の植物」の姿を広く知つていただくためにホームページを作りました。

「饗庭地区の植物観察グループ」のメンバーが毎月 1 回、この地区の植物を調査し、その結果をホームページで発表する計画です。

なお、私の長男(明)と孫(祐之)が技術面で援助してくれています。

平成 18 年 3 月 堀野 善博

ご質問があれば次のメールアドレスへお送りください。

Akira_horino@hotmail.com

詳細メニュー

葉・花・その他で分類しました。何れかをクリックしてみてください。

葉



ギシギシ



サワオグルマ



ノウルシ



カンソウ



ビル

白と黄色の花



シキミ



タネツケバナ



ハコベ



ノボロギク



フキノトウ

赤紫色の花



ショウジョウバカマ



ヒメオドリコソウ



ヤブツバキ



オオイヌフグリ



タチツボスミレ

『フィールドレポーター交流会報告』

[草津市 古谷善彦]

2005年度にフィールドレポーターが行いました3つの調査とその結果について、先にご案内しましたとおり5月28日(日)午後から生活実験工房でおこなわれ、例年通り約20名が参加されました。

調査の結果についてはあらかじめ、「フィールドレポーターだより」で皆様にご報告のとおりですが、まとめをされた担当のスタッフからそれを基により詳しい説明と、博物館の学芸員さんからの興味のある説明やコメントなどもいただき、疑問、質問などいろいろな発言が飛び交いながらなごやかな雰囲気になりました。



エドヒガン調査

一昨年の今津で行った交流会が調査のきっかけとなったエドヒガンですが、今津自然観察クラブからも参加いただき、その後の調査状況についても聞きましたが、なにせ自然本来の植物だけに見つけるのは困難だそうです。

夏のセミ調査

一昨年、昨年と2回に亘っての調査ですが、県内のセミの分布がより広範囲に、そしてクマゼミの北上が県内でも広がってきており、環境の変化との関わりを知る上でも今後も継続して調査をすることに意義があると担当された杉野由佳さんの熱い説明。

竹の利用法調査

今年の調査で皆さんも記憶に新しいと思いますが、博物館での「ギャラリー展」に竹製品をお借りして出展したり2回にわたり竹細工教室「竹細工を作ってみよう」で予想外の好評を得たりと、ここでも竹と環境について考える機会となりました。

紙面の都合で概略になりましたが参加いただいたフィールドレポーター、学芸員の方々 ありがとうございました。

来年の交流会にはより沢山のフィールドレポーターが参加されるよう願っています。

フィールド・レポーター7月・8月・9月予定

次のとおり計画しておりますので皆さんご予定、ご参加お願いいたします。

なお、稀に予定が変更になる場合がありますのでご了承ください。

日 時	内 容	場 所
7月15日(土)13:30～17:00	定例会	博物館交流室
8月05日(土)13:30～17:00	定例会	博物館交流室
8月19日(土)13:30～17:00	定例会	博物館交流室
9月02日(土)10:00～17:00	定例会(掲示板発行予定)	博物館交流室
9月16日(土)13:00～17:00	定例会	博物館交流室
10月07日(土)13:30～17:00	定例会	博物館交流室

(おことわり；上表の博物館とは琵琶湖博物館のことです。)

〈フィールド・レポーター・スタッフから編集を終えて〉

今年も梅雨の季節を迎えました。蒸し暑い日が続きますが、外に出かけるとアジサイが咲いていて涼しい気分させてくれます。

6月の中旬に大津市の長等公園から三井寺の裏手の森を歩いてきました。住宅街からすぐ近くに森があり、公園は手入れされていますが、三井寺の裏山は自然に任されていました。春の花はもう終わり、真夏の花は森の中には日がささないので少なかったのですが、ギンリョウソウの名残の花を見つけましたので、表紙のカット写真に載せました。森の中にはハナミョウガが多く見られ、ピンク色の花を咲かせていました。

オオヨシキリの鳴き声観察の2回目が始まります、1回目の調査で鳴き声の方は記憶されたでしょうから、ぜひ2回目にも挑戦されて調査票をお送り下さい。

また掲示板にも、皆さんのご投稿をお待ちしております。(担当 FRS 椋島昭紘)



掲示板



2006年度 第3号(9月) 通巻第42号

原生動物の分類

フィールドレポーター担当 楠岡 泰

8月20日より2週間ほど中国の研究者を琵琶湖に招待して共同研究を行っています。彼の専門は原生動物(原生生物)の繊毛虫(単細胞生物でゾウリムシの仲間)の分類です。琵琶湖は、日本で最もよくプランクトンなどの微小生物の研究がなされている湖です。そのような琵琶湖でも、海外の湖と比べると報告されている原生動物の種数はほんの少ししかありません。その最大の原因は、日本に原生動物の分類学者がほとんどいないことです。DNAを使った分子系統学研究なら最近少しは増えているようですが、マイナー生物の形態的分類をする人はほとんどいません。

私を含めて原生動物の分類を敬遠する者が多い理由はほかにもあります。一般的に生物を分類するときにはそのグループを特徴付ける形質を見つけ、その微妙な違いにより分類します。たとえばミジンコの仲間は後腹部の形やそこに付いている尾爪とよばれる刺の上に生えている毛の並び方で種の分類をします。この形質はアルコールやホルマリンで固定してもあまり変わらないので、とても有効です。それに対し、多くの繊毛虫は固定すると丸まってしまったり、形がわからなくなったり、場合によっては破裂して、跡形もなくなってしまいます。分類の基準になる確固とした形質が少ないのです。

このように厄介な繊毛虫でも近年、銀で繊毛の基部を染色して、体表の繊毛の細かい配列を観察する方法が開発されました。この方法を用いれば、たとえば草履(ぞうり)のような格好をしたゾウリムシが固定されて、サッカーボールのような形になったとしても、繊毛の細かい配列は変わらないので、種まで分類できるのです。

今回来られた中国の研究者はさまざまな銀染色法を駆使される方です。琵琶湖初記録はもとより、日本初記録そして新種の発見も夢ではないかもしれません。どのような繊毛虫が見つかるか楽しみです。



写真. 花のようなズータムニウム(附着性の繊毛虫)の群体

***** もくじ *****

表題	担当	頁	表題	担当	頁
* 原生動物の分類	楠岡 泰	1	* アボガト追伸	加固啓英	8
* C展示FRコーナーリニューアル	古谷善彦	2	* 外来魚の除去について	加固啓英	9
* 第2回調査締切迫る	多胡好武	3	* 山で遭遇する危険な動物(6)	勝見政之	10:11
* オオシクリ調査票より	桜島昭紘	4:5	* ボランティアメッセに参加しませんか	山崎千晶	12
* 気になる植物2種	加固啓英	6	* 予定・編集後記	FRスタッフ	13
* ゲンジボタル、ナマズその後	山犬の主人	7			

C 展示室の FR コーナーがリニューアルしました

FR スタッフ 古谷善彦

館内 C 展示室にあるフィールドレポーターコーナーではご存知かと思いますがフィールドレポーター調査結果などを概ね1年で展示を更新しています。

昨年は8月から「夏のセミ調査」の調査結果を展示してきましたが、今年は「竹の利用法」の調査結果に置き換えて8月5日にリニューアルしました。

原案作成は FR スタッフの中でも特にパソコンの達人である森さんの主導で、7月から準備が始まり、編集を経て予定通り展示替えが完了しました。

不特定多数の来館者に身近で快適な観覧を楽しんでもらうという趣旨を考慮するとフィールドレポーターコーナーの展示も目に見えないところまで、おいそれとは妥協しない博物館ならではの細かい作業の技を意識して？スタッフのみなさん熱心に取り組まれていました。

右の写真は C 展示室でスタッフによる展示パネルの取替え作業風景です(8月5日)



左の写真は「竹の利用法」調査関連に展示替えしたものです。

展示ボード下のテーブルにフィールドレポーターに関するチラシなども置かれています。

ご来館の際はぜひご覧頂いて、ご意見などもお聞かせください。
(FRS より)

第2回 調査票 締切せまる

【18.8.25】

調査票集計担当 多胡 好武

残暑まだまだ厳しい日が続きます。フィールドレポーターの皆様いかがお過ごしですか
第1回の囀り調査は85件の調査票をお送りいただき有難うございました。

さて、オオヨシキリ第2回調査 オオヨシキリ飛去時期調査ー の投稿締切は9月15日です。前回調査され、オオヨシキリを確認した場所を再度確認してください。

オオヨシキリは10月頃までみられる事もあるようです。

オオヨシキリの囀りが聞こえる所も、聞こえなくなった所も調査票の返信をお願いします。また前回調査地点以外でオオヨシキリの囀りが聞けた場所があればそれもお知らせください。

最近調査したところでは、初夏の求愛シーズンのように飛び回る姿はみられないので囀りだけが頼りですが、オオヨシキリ以外の鳥も多く、セミや虫の音も聞こえてきて同定が難しいようです。



オオヨシキリのさえずり調査票(第一回)から質問9、質問10

FRS 椋島昭紘

(調査票の質問9)、10)に記載いただきましたご意見の中から、編集担当の独断で掲示板に紹介させていただくため、ピックアップさせていただきました。ただ、ご本人のご承諾を頂いておりませんので、ご氏名は差し控えさせていただきました。ご了承願います。}

質問9;あなたの住む地域ではオオヨシキリはなんと呼んでいますか。またこの声を聞いて思
い出すことがありますか?

質問10);今回の調査で何か気づかれたことがあればご記入願います。

- ㊦ 【調査日】4月23日午後【調査場所】草津市志那町葉山川【鳴き声】あり
ヨシ帯が小さく厚みがなくなるとこの場所のように急速に衰退していくように思う。それ
からの再生は意外に困難のようだ。
- ㊦ 【調査日】4月23日午後【調査場所】守山市川田大橋【鳴き声】あり
川原にトンビが10から15羽、上空をもつれあって飛んだり、川床に急降下します。
その中でオオヨシキリはマイペース?で、飛んで、鳴いています。おそろしくないの
でしょうか。
- ㊦ 【調査日】4月24日午後【調査場所】草津市下物町赤野井湾南西奥ヨシ原
【鳴き声】あり
夏の日差しとヨシの緑、でしょうか。オオヨシキリが鳴き始めると、おっ!初夏だなと思
います。鳴かなくなって、どんなに暑くても、もう夏の終わりだなと思います。だいた
いそれがいつも立秋の頃ですね。本当に暦通りです。
- ㊦ 【調査日】4月24日夕方【調査場所】守山市新庄町【鳴き声】なし
野洲川の川床に生えているヨシは案外細いものが多く、毎年の手入れのためかあ
まり成長していない。
- ㊦ 【調査日】4月26日午後【調査場所】守山市ラフォーレ琵琶湖前【鳴き声】なし
立派な湖岸のヨシ原なのにオオヨシキリの鳴き声ぜんぜんしなかったのが不思議で
した。
- ㊦ 【調査日】4月30日午後【調査場所】彦根市野良田町【鳴き声】あり
例年この時期には声を聞いていた。昼夜の区別なく聞こえていたので去年インター
ネット調べたらオオヨシキリだとわかっていて。しかし、去年までいた所(休耕田)
が造成され宅地になってしまい、今年どうなるかと思っていたが近くの小さな場所で
見る事が今年もできた。

- ㇿ 【調査日】5月1日午後【調査場所】守山市稲荷大橋【鳴き声】あり

川床に生えた木草などでヨシ群落が近寄れない所に巣を作っているようだ。釣人が入った踏跡はあるがオオヨシキリノの棲息には適地かも。
- ㇿ 【調査日】5月6日午後【調査場所】湖南省下田 or 日枝【鳴き声】なし

集落を通る川なので水がキレイじゃないなと感じてしまいます。がっちりコンクリートで固めたところも多いので水もところどころよどんでいてその中でアオサギはかんろくがあります
- ㇿ 【調査日】5月6日午後【調査場所】湖南省下田【鳴き声】なし

住宅地と田んぼが入り混じる場所から工場団地が並ぶのが途切れたようなところを流れている川ですが、季節柄青々と草が茂っていました。鳥の鳴き声も意外と良く聞こえていました。こんなところでサギがいるんだなー、と発見もありました。カワセミがいたのにびっくりです。
- ㇿ 【調査日】5月6日午後【調査場所】草津市旧草津川起点～琵琶湖口

【鳴き声】なし

旧草津川の河口から上流へサイクルロードの起点まで調べた水が無いのでヨシは全く無い他の鳥もいない
- ㇿ 【調査日】5月6日午後【調査場所】草津市下笠町湖岸道路【鳴き声】あり

廃土を積み上げた山状になっている処、菜の花が一面に咲いていたその中からオオヨシキリの鳴き声を聞いた
- ㇿ 【調査日】5月14日午前【調査場所】大津市(堅田)今宿【鳴き声】あり

ずっと休耕しているようでヨシにまじってガマの幼穂も20～30本ある。初めてオオヨシキリが鳴く様子を間近に見ました。鳴いては穂先の方に移動します。湖岸近くだから小さなヨシ群の田んぼにも来るのですね。

以上12件です。



標 題 [気になる植物(2種)]

投稿日 [060503]

名 前 [彦根市 加固啓英]

その前にお詫び。フィールドレポーター掲示板 2005 年度第 2 号の私の投稿文[レッサーパ
ンダが立っても...]の下から 11 行目の「庶行」としたのは誤りで、「蹠行(読みはセキコウ)」です。
済みませんでした。

犬や猫の指先の肉球を蹠球(セキキユウ)といい、蹠行(セキコウ)とは、指先で歩いているわけ
です。

増井光子監修の自然と生態シリーズ 日本の動物 哺乳類 だけが蹠球をショキユウ、蹠行
をショコウとルビが振られており、長年誤って覚えていたかと思い、専門書「哺乳類の進化・遠
藤秀紀(東京大学出版会)」およびアマチュアむけの「日本の動物図鑑」の類を 6 冊ほど読み比
べましたが、やはりセキキユウ、セキコウが正しい様です。

〈気になる植物・その 1. オランダイチゴ〉

数年前、植物の観察会で布谷さんに伺った「バラ科を一つの科とするのは適当でない」との
一言が長年気になり続けていました。

素人の私にも果実の作りや枝葉の外観の特徴が共通性が感じられないのです。

先ず、イチゴの果実と思われるものが、肥大した花託と思われる可食部分に規則正しく並ん
でいる様にみえるのです。とすると、サクラやウメの仲間にキク科の様な集合花があると云うこと
になります。子孫を残す仕組みの変化ですから相当大きな変革に思われます。

又、私には外見から系統の類推の出来なかったビワを百科事典で調べましたが、これもバラ
科となっております。

去年の 10 月に 4 品種のイチゴの苗を買い、育てて花を見ていますがどう見ても集合花です。
又、食べる為に買った果物のイチゴからピンセットで果実と思われるツブツブを取り出し、鉢に
蒔いて見ましたが発芽するものなのでしょうか?

多分古典的品種改良は、交配した種子によるものと思いますので気長に観察します。

ストロベリー訳ではない、なんとなく長崎出島を連想させるオランダイチゴですが、それ
以前のイチゴという日本語は何を指していたのでしょうか?

〈気になる植物・その 2. アボカド〉

以前にもこの欄で紹介したものですが、Aug/24/2005 種を鉢に蒔く、と言うよりは埋め、現在
の地上高は 53cm 手製保温箱の天井につかえて頂芽が折れ、2 本の脇枝が伸び出しています。
新ジャガ色をしたゴルフボール大の種子は相変わらず子葉にもならず、葉緑素の色も見えず、
胚乳が消費されて痩せることも無く、根元に頑張っています。

葉は大きなもので葉柄が 7cm 葉身が長さ 23cm 幅 7 cm の細長い形で、垂れ下がり、更に J
時型に巻き上がっています。これは保温の為に下からも裸電球で照らしたせいかも知れませ
ん。弱った葉はあるものの、Apr/17/2006 現在、未だに一枚も落葉していません。

日本のクスノキ科の多くは、中央の葉脈の左右に寄り添う様に、太い葉脈が走っていると思
いでしたが、この葉にはそれが見当たりません。

§ この鉢を、古くからの友人の経営する自動車整備工場(大濱オートクリニック)に、私
が 120 歳になるまで(樹齢 53 歳まで)管理してもらうことにしました。

国遣 8 号線の、南彦根駅近くの高宮の交差点を東に進み、近江鉄道の踏み切り直前の二
股路を右に入ってすぐ近く、車の沢山止まっている所です。

興味が御座いましたら、車の相談にでも託つけて見に行ってください。

表 題【ゲンジボタル】

投稿日【060620】

名 前【野洲市 山犬の主人】
メッシュコード[5236-4072]

去年は初蛍が5月23日だった。今年は遅い。先日のFR交流会で、今年は去年よりサクラの開花が遅かったことが話に出たが、遅いのはそれだけではないようだ。

今年は定時観察を午後9時に徹底したい。初蛍は5月25日だった。たった1匹、しかも飛んでいなかったが姿は確認した。飛んでいるのを確認したのは28日だった。飛んでいるのは3匹だった。年末に堰の改修工事があったことは「ナマズ救出大作戦」で述べた。工事終了後はナマズの姿を全く見ていなかったのもホタルは半ばあきらめていた。それが5月になってカワニナもかなりみられるようになったので18日から毎晩様子を見ることにした。次にその数を示す。雨の後や気温の低い日は少ない。なお、観察はこの後も続ける。

5月

25	26	27	28	29	30	31
1	0	0	10	14	14	15

6月

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
20	25	30	27	15	28	35	15	44	45	35	44	34	15	-	35	15	20

*6/15は雨のため観察せず。6/17は一带の草と植え込みが刈られてしまった。

表 題【ナマズその後】

投稿日【060620】

名 前【野洲市山犬の主人】
メッシュコード41[5236-4072]

堰の工事により水門の下手にダボがなくなり、ナマズの観察が全くできない。水量も多く、濁っていて、流れも速い。水門の構造が変わったため、以前は水門幅が全体幅の半分ほどで中央にあり、その両側は溝に板を落とし込んで水量を2段階調節していたが、工事後は全幅一体の水門となったため、水面の落差がないので流れが速いのである。6月になってからやっと姿を見ることができた。だがたった3回累計で4匹に過ぎない。その代わりと言っては何だが、数十センチの鯉をよく見る。多いときで、一度に5匹の群れを見た。

壮観である。場所はナマズ救出の現場近くである。父が3月に急逝してからは、翌日から朝の犬の散歩も私の役目になった。散歩のときに観察するので余分の手間が要らないが、以前のような観察はもうできないかも知れない。

標 題 「アボカドの追伸」

投稿日 [060504]

名 前 [彦根市 加固啓英]

又々お詫び。謹んで以下の様に訂正をお願い致します。

前回の掲示板投稿、標題「気になる植物(2種)」の、「アボカド(Avocado)」(平凡社世界大百科事典<等では「アヴォカード」)とすべき所を「アボガド」としてしまいました。

* インターネットの素人情報によりますと、種子は有毒とのことです。

こんなものを食べて死んだら、恥ずかしくて街を歩けませんので、口(話題)にはしてもフィジカル(物理的、且つ肉体的)には口にしないで下さい。

有毒物質が何であるかについては触れられていませんでした。

又、「異なる品種間でないと受粉・結実が困難」とのことです。

?? これが理解出来ないところです。園芸書にはブルーベリーやカキ等は他品種の授粉樹を植えることが望ましく、アケビ等も、ムベ等の近縁種からの受粉が必要とありますが、自然界に都合よく近くに近縁の種が自生しているものでしょうか?

(数株ある我が家の実生のアケビは10年以上も「花は咲けども…みのひとつだになきぞ悲しき」状態です。* 雌雄同株・雌雄異花)

動物にも3倍体のみで他の魚の精子の刺激で処女生殖するギンブナ、正常に一卵性4生児を産むココノオビアルマジロ。

ミトコンドリアの母系のみDNA、等、等、理解不能な事象が多すぎます。

☆ お手数お掛けしますが、学芸貴さんの解説をお願い出来ないでしょうか?

花や果実の実りかたについて知りたく、前述の平凡社世界大百科事典等で見ましたが、花卉は無く、6を基数とした萼、雄蕊の花が束になって咲き、桜桃(サクランボ)の様に房状に実った図が載っていました。

表 題 [外来魚の除去について]

投稿日 [060530]

名 前 [彦根市 加固啓英]

yoshihide.kako@gaia.eonet.ne.jp

1970 年代後半に、友人に誘われて総勢 5 人程で近江八幡市の国民休暇村付近の漁港でエビ(?ヌマエビ)を餌にしてブラックバスを釣ったことが有ります。

当時の黒い大きなポリエチレンのゴミ袋が 2 人で一杯になるほどの大漁で、あまり簡単なので、すぐに釣る気が無くなったのを覚えています。

今は分かりませんが、当時は水産試験所に問い合わせても「寄生虫の恐れは無い」とのことで、友人の奥さんの手料理の刺し身やフライを御馳走になり、臭みも感じず、非常に美味しく頂いたことが有ります。

愛知川で鮒釣りや鯉釣りの釣り師に聞いたところでは、ミミズ等の生き餌を使うとブルーギルやブラックバスばかりが掛かってしまうので、グルテンを使っているとのことです。

- * ホビー中心でなく、外来魚の駆除が目的の量がねらいなら、労力の少ない生き餌で翌日まで掛けっぱなしでよい「延縄(はえなわ)」でも良いと思います。
- * 調味料を使わない、水煮にすれば、犬や猫の餌には最適です。
- * ブラックバス(オオクチバス)はアメリカでは釣り人に人気の食材と聞きます。
- * 食べることを普及するには、調理法の公開が欲しいところです。
- ☆ これらの美味しい調理法をご存じの方が居られましたら、お教え下さい。
- ☆ 近々、子供たちと実行して見たいと思います。成果が上がりましたら皆様にもお奨めします。
- ☆ ブラックバス・ブルーギルを商品券の様なものと交換してくれる制度があると小耳に挟みましたが、何処でどのようにすれば良いのかをご存じの方がおられましたらお知らせ下さい。

【山で遭遇する危険な動物に関する調査・報告】 ヒルについて



2004年7月20日、伊吹山の夜間登山の帰りに、霊仙山の谷山谷道の登山口(上丹生(かみにゅう))に立ち寄り、【登山一口メモ】の看板をデジカメで撮影しました。

『鈴鹿の山では、5月中旬～10月頃まで、特に雨上がりは、山ヒルが多いです。』

(ヒルから足などを保護するには)、食塩を足に(靴の上から)振り掛けながら登ってください。一番安くて効果があります。

7月中旬から9月中旬まで、虻(蜂ではありません。体のまわりを回ります)が、体に止まり噛みますが、手で捕えても刺しません。』

・私が還暦を迎えて登山を再開(2003年)してから、初めてヒルに吸い付かれたのは、6月に、霊仙山の谷山谷登山道を登った時です。この登山道は、その名の通り、水量が多い沢沿いの道で、足の甲の辺りがむず痒くなって来たので、靴下を裏返すと、体長5cm位のヒルが数匹、吸い付いていました。

・ヒルに吸い付かれたのは近年では初めてなので、気持ちが悪く、持参したハサミで除去しました。帰ってから水道水で、足と、登山靴・靴下を洗っていると、多数のヒルがくっ付いていて、水が血で真っ赤になりました。

・鈴鹿山脈の山はヒルの名所です。ヒルに吸い付かれると、むず痒くなりますが、文献によると、毒性がないとのことですので、メントームを塗る程度です。霊仙山に登った時、首に血が付いたタオルを巻いておられた人が、『ヒルにやられました』と言っておられました。事実、ヒルは木の枝や葉っぱからも飛んで来るようで、私も多賀の高室(たかむろ)山に登った時、首筋にヒルが吸い付き、シャツの襟に血がこびり付き、洗濯してもシミになって、なかなか綺麗になりませんでした。

・上掲の看板には、「食塩を塗るといい」と書いてありますが、靴の金属部分が錆びると困るので、私は、食塩は塗っていません。

・何故、鈴鹿の山にヒルが多いのか、不思議です。他県の山でも、水が多い所には、やはりヒルはいるのでしょうか？

〔引用文献〕

〔こども動物大百科(全12巻)第11巻 水の中の小さな生き物〕(34～35頁)(平凡社 武田正倫監修 1990年2月20日 初版第1刷発行)

〔ヒルの仲間〕

・日本に棲んでいる仲間:アタマビル、ウオビル、カイビル、キバビル、チスイビル、ヒラタビル、ヤマビルなど、35種以上。

・食べ物:他の動物の体液を吸ったり、丸ごと食べる。人間や他の哺乳類の血を吸うものも多い。

・人間の血を吸うチスイビル:顎にある3本の歯で皮膚にY字形の傷を付けて、そこから血を吸います。吸盤で吸い付いています。

〔薄い皮膚〕

・ヒルの皮膚はとても薄くて、ねばねばしています。動くと、時には体の形が変わり、たっぷり食事をした後は、太って丸くなります。

〔チスイビル〕

・チスイビルは、昔、病気を治すのによく使われました。病気になるのは悪い血のせいだと考えられていた時代のことです。ヒルは人間の血を吸うのが大好きですから、ちょうどぴったりです。ヒルに悪い血を吸わせれば、どんな病気も治ると、信じられていたのです。

・ヒルは皮膚に吸い付くと、顎の歯で傷を付け、血を吸い出します。その時、血が固まらないようにする液も出します。血を吸われた人は、この液のために眠くなります。

〔ヒルの前進〕

・前と後ろの吸盤を、交代に地面にくっつけて進むので、他の動物のような剛毛はなくても平気です。

〔獲物を待つヒル〕

・獲物が通りかかるまで、枯葉の上で、1年でも待っています。

(今回で、拙い連載を終わらせていただきます。以上)

ボランティアメッセ 2006 IN 九州博物館に参加しませんか？

F R 山崎 千晶

今年のボランティアメッセは九州・大宰府の九州国立博物館で開催されます。

[新風～結び合う、学びあう、楽しいボランティアの輪] とのテーマの呼びかけに賛同した日本中の博物館・美術館からボランティアたちが集まります。

琵琶湖博物館からの参加は、フィールドレポーターと、はしかけの「びわたん」「たんさいぼう」です。

他の博物館からは「長崎美術館」「人と自然の会・人と自然の博物館」「佐賀本丸歴史館」「江戸東京博物館」「江戸東京たてもの園」「三沢航空科学館」「京エコロジーセンター」「ナガサキピースミュージアム」「福岡アジア美術館」「大和ミュージアム」「日本科学未来館」「萩博物館」「国立科学博物館」などのブース展示があり、「伊丹昆虫館」「山口県立美術館」「国立民族学博物館」「明治大学博物館」「九州国立博物館を愛する会」「九州国立博物館」「福岡市立美術館」からはポスター展示があります。

スケジュール

- | | | | |
|----------|-------|---|--|
| 06年9月23日 | 13:00 | : | 受付 ブース展示準備 |
| | 14:00 | : | 二胡コンサート、ボランティアへの提案
九州国立博物館ボランティアからみなさんへ
みんなでフリートーク |
| | 19:00 | : | 懇親会 |
| 9月24日 | 10:30 | : | ブース展開始 |
| | 16:00 | : | 終了撤去
他、合間を縫って九州国立博物館や各館の見学や交流 |

フィールドレポーターは「竹で遊ぼう」とのテーマで竹製の遊具を持ち込み来館者とふれあいます。

いま、竹かるた 竹笛 竹輪投げ などを計画・制作準備中です。

昨年、萩博物館で行ったように今年は九州国立博物館で、ポスター展示と遊具で琵琶湖博物館をアピールしてきます。

フィールドレポーター8月・10月・11月の予定

次のとおり計画しておりますので皆さんご予定、ご参加お願いいたします。
 なお、稀に予定が変更になる場合がありますのでご了承ください。

日 時	内 容	場 所
9月16日 (土)13:30～17:00	定例会	博物館交流室
9月23(土)、24(日)	ポランティアメッセ2006 IN 九博	九州国立博物館
10月07日 (土)13:30～17:00	定例会	博物館交流室
10月21日 (土)13:30～17:00	定例会	博物館交流室
11月04日 (土)10:00～17:00	定例会(掲示板発行)	博物館交流室
11月18日 (土)13:30～17:00	定例会	博物館交流室

(おことわり；上表の博物館とは琵琶湖博物館のことです。)

〈フィールド・レポーター・スタッフから編集を終えて〉

猛暑の8月が終わり9月になって、セミの鳴き声も減り、アオマツムシが鳴き出しました。朝も少し涼しくなってきたようです。田んぼでは早くも稲刈りが始まっています。

8月お盆休暇に伊吹山のご来光を見るため散歩(横着にもドライブウエーを車で)に出かけました。日の出前の散歩はとても涼しく長袖で丁度良い、心地よい朝です。5時15分朝靄の上に太陽が昇ってきました。山頂に朝日が差すとお花畑には、ピンク色のシモツケソウが一面に咲いていて、歓声上がりました。その間にはメタカラコウの黄色の花、コオニユリのオレンジ色としばらく見とれて立ち止まりました。今年は10日位花が遅れて咲いたようで、ラッキーでした。表紙のカットにコオニユリを載せました。

オオヨシキリの鳴き声観察の2回目が締め切りせまります、ぜひ2回目にも挑戦されて調査票をお送り下さい。

また掲示板にも、皆さんのご投稿をお待ちしております。(担当 FRS 椛島昭紘)



掲示板

2006年度 (11月) 第4号 通巻第43号



博物館ボランティアメッセで小耳に挟んだこと

フィールドレポーター担当 楠岡 泰

九州国立博物館で開かれた「ボランティアメッセ 2006」に、レポータースタッフや「はしかけ」として参加してきました。ボランティアメッセの細かい内容はほかのスタッフの方が報告してくださると思いますので、メッセ会場で他の博物館の関係者やボランティアから聞いた話をいくつか紹介します。

ここ 10 年ほどの間に多くの博物館でボランティアを導入しています。その中には行政サイドのトップダウンの政策によりボランティア制度を取り入れた博物館がいくつもあるそうです。生涯学習を盛んにするためのボランティア組織もありますが、多くの場合ボランティアを安い労働力と考慮して導入しているようです。ある博物館では「ボランティアを 200 人集めたら、何人学芸員を削減できるのか」といった発言をする行政の方がいたそうです。ボランティアを安い労働力と考慮している博物館ほど労働には代価が必要と考えるのか、交通費や弁当代などを支給しているようです。

最近ボランティアに任期制を引いている博物館が増えているようです。これはボランティアの数が増えると交通費などを支給する博物館の負担が増えるためだそうです。また、館によってはボランティア同士の間人間関係が悪くなり、いじめみたいな事が起こり、それを理由に、任期制を取り入れた博物館があるそうです。

幸い琵琶湖博物館ではフィールドレポーターやはしかけに対し補助はしておりません。よって、登録者数を制限したり、任期制を引いたりする予定はありません。

複数の博物館のボランティアから琵琶湖博物館では「ボランティア」が学芸員や博物館に対して要望を出せていいですね。と言われました。多くの博物館ではボランティアは一方的に博物館の指示に従うだけで、発言は出来ないようです。大体学芸員室にボランティアが入れない館もあるそうです。

ボランティア制度とは一味違ったフィールドレポーターや「はしかけ」制度をもつ琵琶湖博物館はよその博物館からはいろいろな意味で注目されています。フィールドレポーター制度をさらによいものにするために、皆様と一緒に考えたいと思います。皆様のご意見、要望をお寄せください。

***** もくじ *****

表題	担当	頁	表題	担当	頁
* Vメッセで小耳に挟んだこと	楠岡 泰	1	* 展示会場の一言メッセージ	古谷善彦	9:10
* 学芸員紹介	田村健太郎	2:3	* 草津市市民の日	椋島昭紘	11
* ボランティアメッセ IN 九博	森擴之	4	* 県立曽根沼縁地公園の生物	加固啓英	12:13
* 展示効果を計測できるなら	津田國史	5	* トラップと電撃捕虫器ゲーム	加固啓英	14
* アジア交流の拠点 九博	山崎千晶	6:7	* ヨシ笛コンサート・話聴きました	古谷善彦	15
* 博物館のボランティア活動は	前田雅子	8	* 予定表・編集後記	椋島昭紘	16

里口 保文さん(層序学専攻)

守山市 田村健太郎

すべては時間の流れの中に……

琵琶湖が生まれた 400 万年前からの火山灰を探す。



琵琶湖博物館でお仕事されている学芸員さんの紹介コーナーも 18 回目となります。館内に貼り出されている学芸員紹介パネルを見せてもらいました。その中で「火山のない滋賀県でその火山灰を探している……」という里口保文さんに会ってみたいとなりました。インタビューは博物館が忙しい夏休みが終わろうとする 8 月 30 日でした。

子どものころはどんなことが好きでしたか？

もともと生き物には興味がなく、かといって化石や岩石・鉱物にも興味がありませんでした。どちらかというとなら岩石や鉱物そのものより、どうしてそのような事が起こるのか、その現象を調べるのが好きだったようです。現象を知りたいという欲求は大人になった今でも変わっていません。

いつ頃から地質学に興味を持つようにたれたのですか？

高校生の頃は宇宙に興味がありました。宇宙でどんなことが起こっているのか、それで好きな宇宙の本を読んでいました。そのうち宇宙のことから、だんだんと地球のことに興味がわいてきて大学では地学をやりたいと思うようになりした。その中からなんで「層序学」に入ってしまったかというのは単なる偶然だったと思います。

地質学からどんなことがわかるのですか。

自分たちが生きている日本の地盤は今現在こういう形になっていますが、このようになるまではいろんな環境変化があったはずで。過去の出来事は、たとえば歴史書や記録文書などを見ることで昔の人がどんなことをしてきたのかが分かります。しかしそういう記録がない場合、昔の事を記録している他のものを探する必要があります。それは、地層などの地盤を主とした地質から調べることができます。

たとえば日本の地盤は、どういうことが起こって、日本列島ができあがったのかを記録しています。また、今現在どんな地形をしているのかを知ることは、その地形を造るためにどんな地球の活動があったとかを知ることに繋がります。地質学というのは、地層や岩盤などの地質を対象に研究する学問ですが過去にどのようなことが起こって今の状態になったのかを調べるものでもあります。そのような研究は歴史的な変化を知ることですから、まさに歴史科学と言えますね。

ご専門の地質学の中の「層序学(そうじょがく)」とはどんな学問ですか？

層序学とは地層の「層」と順序の「序」ということで、地層の重なり順の順序を考える学問ということです。地層は泥や砂が運ばれてきて溜まってできます。ものがたまってできる地層は、時間がたつにつれて上へ上へと順番に重なっていきます。言い換えると、今できあがっている地層を下から上へと見ることは、古い時代からどんどん時間がたって、より新しい時間にできたものを見るということです。ですから、地層の順番を知るということは時間経過によってどういう地層ができて、それをためる環境がどう変化していったのかを知ることでもあります。ですから簡単に言うと、層序学は地層の順序から過去のいろんな移り変わりを調べることが対象になります。

私はその順序を調べる手段として火山灰を使っています。日本は火山国といえますね。少なくとも古琵琶湖(昔の琵琶湖)があった400万年くらい前の時代からは火山国だったみたいです。それはなぜ分かるかというと、昔の琵琶湖がつくった地層(古琵琶湖層)にはいっぱい火山灰が入っているからです。ただし、それは昔の滋賀県内に火山があったという訳ではなく、一つには九州、他には信州の火山から火山灰がきました。最近では東北から来ていたものがあるとも言われています。

それくらい広範囲に広がった火山灰は、琵琶湖の他に、関東などの離れた地域でも同じ火山灰を見つける事ができます。その火山灰は同じ時に降ったものですから、その火山灰を含む地層も同じ時代のもと考えられます。地層からは当時の環境がわかりますから、同じ火山灰があることがわかった地層の同時間と併せて、広い範囲での環境の違いがわかります。このような大噴火でできた火山灰というものは、すごく特殊なものではなくて、一万年に一回くらいの頻度で起こっていると言われてます。

火山灰というのは一つ一つに含有鉱物や成分などの特徴があります。古琵琶湖層にある火山灰は100以上ありますが、それぞれに特徴があるので見分けることができます。そうやって火山灰で同じ時間にできた地層中の面をいろんな地域で探して地層の順序を調べていく、これが私の研究している火山灰層序ということになります。

今後の研究は？

古琵琶湖層を使って現在までの環境変化がどのようにして、またなぜそのように起こってきたのか調べていきたいと思っています。おおまかな変化はある程度分かっていますが、なぜそのような変化が起こってきたのかは全然わかりません。いま行っている共同研究は古琵琶湖層の一番はじめの時代で今の琵琶湖になるまでにはどんな環境でどのように移り変わってきたということを調べようとしています。

里口さんが火山灰を使って古琵琶湖層の歴史を探求されていることが少し分かったようです。いろいろご教示いただきありがとうございました。

里口さんの略歴

1970年 大阪府生まれ

1997年 大阪市立大学大学院理学研究科後期博士課程地質学専攻修了(理学博士取得)

1997年 滋賀県立琵琶湖博物館学芸職員、現在に至る

「ボランティアメッセ 2006 IN 九博」

森 擴之

晴天に恵まれた、9月23日秋分の日の朝7時、FRS山崎さんに手配して頂いた“のぞみ”乗車券をポケットに、守山駅目指して自転車を走らせ、7時38分発の新快速に飛び乗り京都駅へ。

先に到着していた、楠岡さんはじめFRSの津田、前田、山崎、高田の皆さんと、新幹線下りホームで合流、一路九州へ。博多到着後駅コンコースの売店で、それぞれ好みの博多特製弁当を買い入れ、地下鉄、西鉄と乗り継いで11時過ぎ太宰府に到着。

太宰府天満宮に10円の賽銭でメッセの成功を祈願した後、境内を抜け、長いエスカレーターとトンネル内の動く歩道の上を歩いて、やっと国立九州博物館へ到着。前日に車で到着していた“はしかけ”グループの参加者と合流。直ちに琵琶湖博物館に割り当てられたブースの片隅での特製弁当の昼食もそこそこに、前もって宅急便で送付しておいたパネル、竹製品、手作り竹玩具などの展示作業を行い、開会式の始まる15時までには何とか完了した。

開会式に引き続き、鈴木章生氏(目白大助教授)の講演「ミュージアムボランティアの歩みと未来」、九博ボランティアの活動紹介、パネルディスカッション「ミュージアムボランティアの未来を語る」と続き、19時過ぎからはオープニング・バンケットが開かれ、参加博物館ボランティア相互の情報交換の場が持たれた。

パネルディスカッションでは、我々の仲間“びわたん”の北村さんがコメンテーターの一人として登壇され、ほかの博物館ボランティアとは性格の異なる琵琶湖博物館の「はしかけ」、「フィールドレポーター」制度の現状と未来像についてのコメントを期待したところであったが、今回のパネルディスカッションでは、コーディネーターの一人舞台上、期待はずれに終わった感があり、残念の一語に尽きる。



翌24日メッセ本番で、多くの一般来館者の来訪が期待されたが、「日本文化の形成を、アジア史的観点から捉える」という、九州国立博物館独自のコンセプトのためか、一般来館者相に偏りがあり、過去4回行われたメッセと比較して盛り上がり欠けた結果となった。

しかし、そのぶん“全国のミュージアムボランティアがその活動を紹介しあい、交流を深める”とするメッセ本来の目的が達成されたものとなった。

17時、「ボランティアメッセ 2006」も無事終了。パネル類を撤収し、天満宮参道の茶店にて、反省会もかねて、楠岡さんから太宰府名物“梅が枝餅”をご馳走になり、翌日も九州近傍を散策されるスタッフと別れ、楠岡さんと二人、缶ビール片手に博多より、のぞみ号にて一路帰途についた。

以上



追伸：天神屋台も一寸のぞいて、はずれのラーメン店で塩ラーメンを食べました。

9月23～24日の両日、九州国立博物館でのボランティアメッセに参加して、私は展示効果について考えさせられた。

多くの展示内容はパネルを見ることでおおよその理解はできるが、その中で説明されている項目について興味がわき、もう少し詳しく知ろうとするとやはり解説してくれる人が必要であることを体験した。

ボランティアメッセには多くの博物館のボランティアが、自分たちのこれまでや、今の活動状況をパネルに画像・グラフで表現報告していて、それは当たり前光景となっている。

私たちFRの、竹の調査パネルを表示した今回の九博メッセでは、竹玩具の展示に興味を持って見てくださる方は多く、竹玩具に触れ、それで遊ぶ人は沢山だが、ほとんどの方が後ろのパネル内容にまで関心を示すことなく去って行かれ、調査結果のパネル表示にうまく結びつかないもどかしさを感じていた。

たまたま数名のボランティアが来られた折、その中の一人に竹製品の話をして、これらの製品は滋賀県内でこんな風に使われていて、今はこのように変化していますと、調査内容を表現したパネルで説明したところ、がぜん、関連した質問を次々とされた。この方の興味に応えるには竹調査のまとめをお見せするのが何よりと思ったが、まとめを報告したレポーター便りを持って来てなかった。これは大きな失敗だった。

竹製品の調査を表題にした展示で、パネルでの表示は十分に出来ていたのに、そのまとめ報告書を提示できてなかった。その元になっている資料をこそ提示して、FRの竹調査の実態を見てもらうべきであったとの思いがした。

パネル内容にまで関心を示され、深く説明を求められる方は多くはないが、ボランティアメッセであればこそ、こうした企画～調査～展示の過程に興味をもたれるのであって、他の展示会では見られないものだと思う。

展示だけでなく、それにいたるまでの説明をするとより理解されやすく、相手の反応によって説明を加えていけば、より深くフィールドレポーターの活動の実際をいろいろ知ってもらえるのではないだろうか。

ほとんどが、博物館の展示案内サービスを主体とされているボランティアメッセの参加者に、自分たちとは異なる活動をしている、琵琶湖博物館フィールドレポーターの調査活動の実態に触れてもらえる最適の機会である。

ボランティアメッセでは、展示を通じてもう少しフィールドレポーターの活動をアピールできるなにかを見つけ出さなくてはと痛感させられた。

九州国立博物館(九博)は天満宮を囲む山の裏にあり、トンネルを抜けるとブルーに輝く二重ガラス張りの壁面に、ゆるやかなカーブを描く屋根を乗せた大きな建物が現れました。



トンネルを抜けると九州国立博物館が

エントランスは五階までの吹き抜けで、高い天井には松の間伐材が並び、これで湿度の調節が出来ると聞きました。二階は耐震構造の収蔵庫になっていまして、バックヤード見学の折に説明をうけましたが、地下に設けられているというバネ構造までは見せてもらえませんでした。私が飛び上がったらどう反応するのか、しないのか確かめたかったのですが。

バックヤード見学時には、学芸員室のある廊下に入るのにもICカードが必要で、随所に監視カメラがあり、セキュリティーと国立である敷居の高さを感じていました。

古文書修復の部屋では、これまでは大量の古文書の修復を京都に発注していたが、修復文書と同質の紙漉きができる工房が新設されたので、虫食い箇所の補修や裏打ちができるようになったと説明をうけましたが、現代の紙ではまったく用をなさない修復作業はたいへんな根気と細心、繊細な技能が求められることを知りました。

陳列物への対策が、展示室は意外に暗くしてあり、古い地層の剥ぎ取り展示や、出土器、石器、青銅の鏡や剣、金印、勾玉、書物、陶磁器や、遣唐使が運んできたもの(ガラス、絹、香、経典、書物)などアジア各地の政治、文化、民具に関係するものが陳列されていて、大きく広いフロアは順路の決まりもなく、好きなところを自由に見られるようになっていました。中国からの陶磁器に興味を引かれるものがあり、当時の人たちがどんな思いでこれらの器を愛で、日用の品として扱っていたのか気になりました。



収蔵庫の一部 ガラス越しに見ることができました

韓国のいくつかの博物館関係者が招待されて来られていましたので、私たち琵琶湖博物館のフィールドレポーターの活動も紹介できました。

福岡のいたるところでハングル文字の標識を見かけ、交通機関はもちろん、メニューにもハングルが見られ、大陸との距離と、太古からアジア各地との交流の拠点として、九州が果たしてきた多くのものを体感できました。



琵琶湖博物館の交流室より少し大きいボランティア控え室でした

博物館のボランティア活動は

前田 雅子

ミュージアムボランティアが交流するボランティア・メッセに、今年も参加しました。博物館、科学館、資料館、美術館、水族館などの文化施設におけるボランティア活動は、年々盛んになっているようです。交流会で得た情報や、各館の活動について報告します。

熱の入りが違う九州国立博物館ボランティア

九州国立博物館(九博と略す)ではボランティアを250名募集したところ840名の応募があったため、レポート審査で290名を選んだそうです。日・英・中・韓4ヶ国語の館内案内、展示解説、体験展示室での学習支援、手話通訳といった来館者サービス活動のほか、イベント開催、館内の有害生物管理活動(清掃やデータ収集)をしていて、ボランティアの活動が博物館に大いに貢献している印象を受けました。

あるボランティアは、「博物館と地域の橋渡し役として我々が活躍することで、生き生きした博物館にしたい」と言います。九博は熱い想いの人達に支えられていると思いました。

けれども、「細かいマニュアルが規定されていて、ボランティアというより仕事みたい...」という声もありました。熱意があるだけに、自主的に動けない歯がゆさを感じるのかも知れません。九博はボランティアとのパートナーシップを掲げています。良い方向へ向かうと期待しています。

ボランティアの活動内容は様々

多くの館で行なわれている活動は展示案内、実験や観察会の補助、図書の整理・補修などです。入館者の受付、お茶の接待、下見に来た人の案内をする館もあり、ボランティア活動の守備範囲の広さに驚きますが、フィールドレポーターもよそから見れば変わった活動と思われるようです。

最近急成長しているのは、ボランティアが企画実施する自主活動(ワークショップやイベントの開催)です。メニューから選ぶのではなく、メニューを作る活動が志向されています。



気になる任期制

ボランティア活動に任期があるのかと驚かれるでしょうが、ここ2、3年くすぶり続けている問題です。活動がマンネリ化する、新旧で対立が生じる、交通費などの支給がある館は経費節約のため、ボランティアの人数が多い館は新しい人を入れるためだとか。

九博では3年任期制が導入されています。再任もあるそうですが、どうなるのでしょうか。全国が注目しています。

表 題【展示会場での一言メッセージを紹介します】

投稿日【061117】

名前【草津市 古谷 善彦】

九州国立博物館で9月にボランティアメッセが、そして10月3日から15日まで琵琶湖博物館のアトリウム横の交流「新空間」で、それぞれ展示交流が行われましたが、フィールドレポーターは両会場に「メッセージボード」を設けたところ、たくさんの来場者から感想などを書いて貼り付けてもらうことが出来ました。

その数は合わせて182枚にも及びました。さてさて、各々の会場でどれだけたくさんの人たちが琵琶湖博物館のブースを訪問してくれたのでしょうか？

詳細は参加した人だけでしょうか。ちょっと皆さんも想像してみても如何でしょうか？(ひょっとして遠征したスタッフがどこかに書いているかも？)

そんなことを考えながら、その内容をまとめて紹介することにしました。



竹をテーマとした展示や遊びがメインだったようですが、その「竹」に関するメッセージが17枚ありました。うち90%が大人で50歳前後が多く、魚に関するメッセージが36枚、たのしかった、おもしろかった、また来たいなどが合わせて103枚は子供が殆んど。ふざけ13枚、絵9枚、他4の内容でした。

項 目	枚数	比率	主な年代	内 容
たのしかった、おもしろかった	103	57%	子ども	又来たいを含む
さかな	36	20%	子ども	絵だけを含む
竹	17	9%	50台が多い	文言が多い
ふざけ	13	7%	子ども	うざい…など
絵	9	5%	子ども	人形など(女兒)
その他	4	2%	子ども	犬、蛙、マンモス
合計	182	100%		

「また来たい」と書いた用紙は「たのしかった」「おもしろかった」の文言と併記してあるものが多かったので同じ項目にまとめました。

紙面の都合でほんの一部しか紹介することが出来ませんが、項目別に特徴のある又は、おもしろいメッセージを原文のまま記します。(お名前は省略)

1 たのしかった、おもしろかった(又来たい)

「今日の一日めっちゃくちゃおもしろかった、みんなといっしょにこれたし、みんなでここにくるのがやっぱりおもしろい」(考えたさん)

「楽しかったいままでこんなたのしいのなかった、またきたい！！」

「だいぶおもしろかった、サイコーやまたこようと思ったヨッシャーハッスル×2」

2 さかな

「さかなにはいろいろな種類があるのがわかった！！」

「エイはいないんですか、いなかったらショックです」

3 竹

「竹のビュンビュンまわしおもしろかった」

「身近にはえている竹からこんなに面白く素晴らしいおもちゃが作られていたことに感激しました」(64才)

「竹っていろいろあるんだ知らなかった」(11歳)

「まっすぐな竹からこんな素敵なものが沢山出来るなんて！！」(37歳)

「いつも生きている竹、笛になって音になっておもちゃになって、幼な子の手の平で語りかけてくれる、心がたくさん語りかけてくれる」(女性)

「昔ながらの竹細工大変懐かしく思うと共に孫に何か作ってやりたく思います。字合わせ、絵合わせ、素晴らしく学校などにも取り入れたらなんて思いました。大変興味を持ちました。」(T)

「いろいろなおもちゃを作っていました。今後は時間を作ってまごに作ってやろうと思います。参考によく見て帰ります」(50歳男性)

「漢字知ってるつもりでも大変だった、良い勉強になりました。80才の記念になりました」(女性)

「知らない字を覚えました、」(日南市 59歳)

「竹」のメッセージはどれも大人で中身の濃いものばかりで感心しました。

最後に「竹」豆知識で竹分類学者室井綽博士の「綽」は何と読むんですか？」(55歳男性)というのがありました。残念ですが私にも読めません。



草津市「第7回パワフル交流・市民の日」に参加しました。

FRS 椋島 昭紘

昨年度に引き続き今年も、琵琶湖博物館としてイベントに参加しました。今年は会場が草津市役所になりました。(昨年はずこやかセンター)1階ロビー中央ステージでの消防音楽隊のオープニング演奏で始まり、草津市長他の挨拶など開会式が行われました。屋外には自治会などの模擬点(うどん、おでん、朝鮮料理、バザーなど)が立ち、市役所2階がメイン会場で、展示ブース、ステージが設けられていました。琵琶湖博物館には10ヵ所の展示ブースの1ヶ所の割り当てをもらい、展示しました。「はしかけ」の活動紹介と、「フィールドレポーター」の活動紹介は竹の調査結果を展示しました。ボランティアメッセ(九州国博)で紹介した展示を活用しました。

お客様良く立ち寄っていただき、竹で作った漢字・絵・カタカナ合わせのゲームが好評で、子供から大人まで楽しんでいただきました。中でも「策」が難しいようでした。また、竹の調査報告も興味深く読んでおられました。

2階会場全景・展示準備中のスタッフ



琵琶湖博物館のコーナーの様子、ゲームに熱中されている、お年寄りと小学生



表 題 [県立曾根沼縁地公園のやっかい生物]

投稿日 [060802]

名 前 [彦根市 加固 啓英]

県立曾根沼縁地公園(30 5236-6185)で県土木のマイパーク・サポーターなる仕事(ボランティア)をしています。仕事の内容は主に水辺や遊具の安全点検です。

ここでは一寸問題も有ります。

この周回路の傍でスズメバチが「カチ、カチ、カチ、カチ、寄らば刺すぞ！」の警戒音。そこで、NHK の番組「ご近所の底力」で紹介されたペットボトルのトラップに小改善を加えたものを設置しましたところ次々にスズメバチや蛾が捕れまわります。

子供達がハチに刺されては困るが、自然界の生き物をゴボウ抜きにして良いものかは一寸後ろめたい気がしています。(トラップの作り方は別紙にて...)

* どなたかアシナガバチの様な肉食のハチをトラップに誘う餌または誘因物質についてご存じでしたらお教え下さい。

同公園の池の周囲のススキを粽(チマキ)状に巻いたものが多数みられます。

悪い予感！これは話しに聞く毒蜘蛛、カバキコマチグモの仕業ではないか？

これをポリ袋に入れて持ち帰り、お湯に浸け、琵琶湖博物館の質問コーナーで見て頂きカバキコマチグモであると「お墨付き」(又は「札付き」)を頂きました。

このクモは出版物毎に毒牲の記述が違い、恐ろしいのか大した事はないのか分かりませんが、兎に角「触らぬクモにたたり無し」です。

直接人を害する昆虫等の小動物対策。

《イラガの幼虫》あの黄緑色の、鎧袖一触、猛烈に痛がゆい奴です。

繭の中のサナギは江戸時代の大名道楽のタナゴ釣りの餌でした。

割り箸でつまんで台所用洗剤を一滴加えた水に落とし込むだけです。

長袖、つば広帽子、頂(うなじ)にタオル、これぞベテラン害虫ハンター・スタイルです。「イモムシ、ケムシ、挟んで捨てる」

一本の樹木当たり 2 分も掛かりません。健康に有害な殺虫剤を樹冠まで撒かずに人の触れる高さの範囲の毛虫だけを取り除くだけで十分だと思います。

《セアカゴケグモ・不良外来アリども etc》温暖化に後押しされてかセアカゴケグモは既に各所に定着、九州などでは、すごいアリが猛威を...

大薬缶の冷水で気絶した選手を蘇生させるのがラグビー。

冷水をお湯に換えれば、触れることなく生きている厄介者を駆除出来ます。

アッケラカンとした私生活で、隠すべき個人情報も有りません。

何なりとメールを下さい。

yoshihide.kako@gaia.eonet.ne.jp

「ご近所の底力」のトラップ

酒 1.8l
酢 0.6l
砂糖 750g

トラップ本体炭酸系飲料 1.5l 用
(内面が平滑でハチが落ち易い。)

液は深さ 75 mm程必要。

上記の液でおよそ 8~10 本分。
上部に 1.6 cm角の穴を 3 個。

小改善後

賞味期間切れ、又は爛冷ましの処分待ち。

台所用洗剤 2 滴

350 ml 程度の小さなペットボトルで良い。
(凹凸が有っても良い。)

洗剤で液に触れれば直ちに濡れて逃げられなくなる。肺まで濡れるのか、すぐに死ぬ。

深さ 50 mm程必要。

左記の約倍の本数分。

穴は大きめにしても逃げることはない。

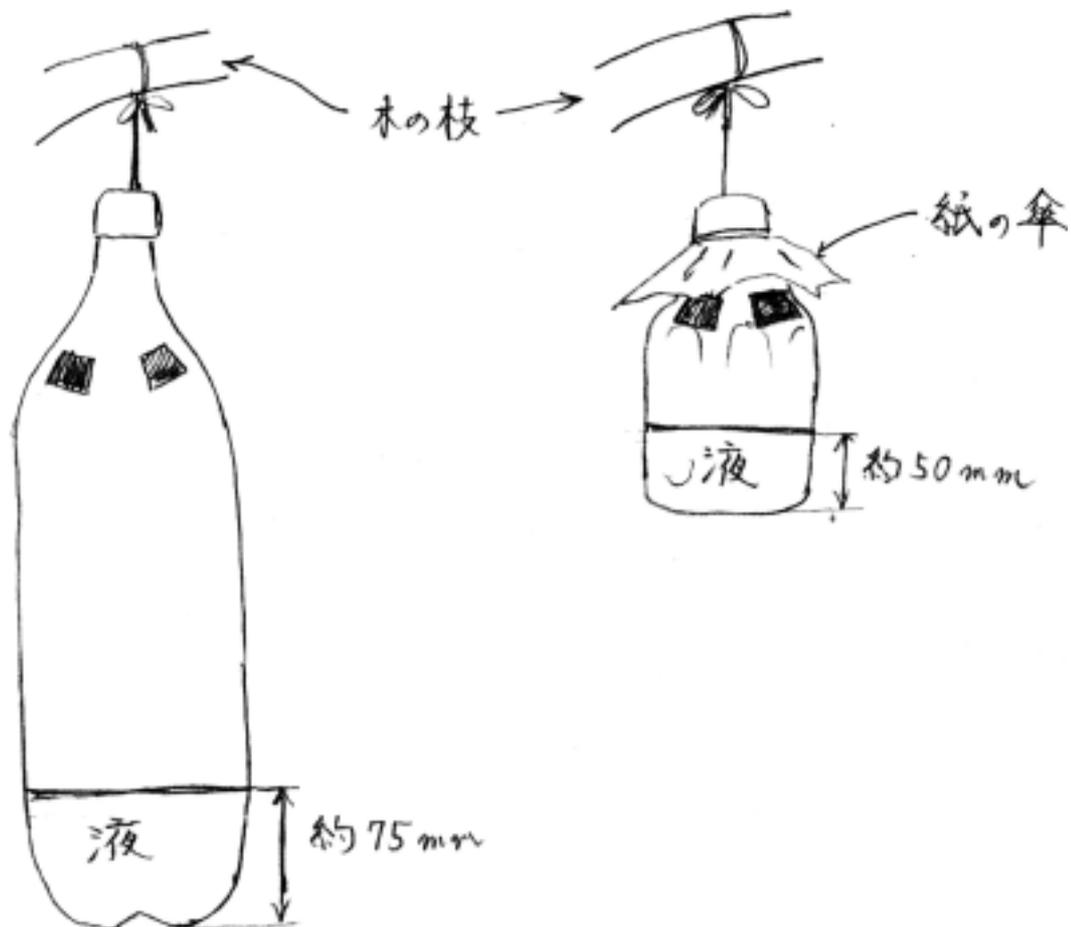


表 題 [トラップと電撃捕虫器のゲーム]

投稿日 [070708]

名 前 [彦根市 加 固 啓英]

以下は、次の方法で採取された昆虫です。

A)NHKの番組「ご近所の...(スズメバチ)」に示された物を少し改善したPATボトルのトラップ

場 所 : 彦根市三屋町、県立曾根沼緑地。(30 5236-6185)

期 間 : Ju1y/02/2006(Sun)昼間 ~ Ju1y/08/2006(Sat)昼間、

改善点 : 台所用洗剤をボトル一個当たり二滴ずつ加えた。これにより体や肺書の撥水性が失われ、液に触れるとすぐに溺死・窒息死する。

* スズメバチ対策に仕掛けたものです。

どの様な内訳で、問題のある昆虫はいないですか？

* 入り口の穴より大きそうなガが見受けられるのですが、不思議ではないのですか？

B) 電撃蚊取り器(B1ackHo1e)

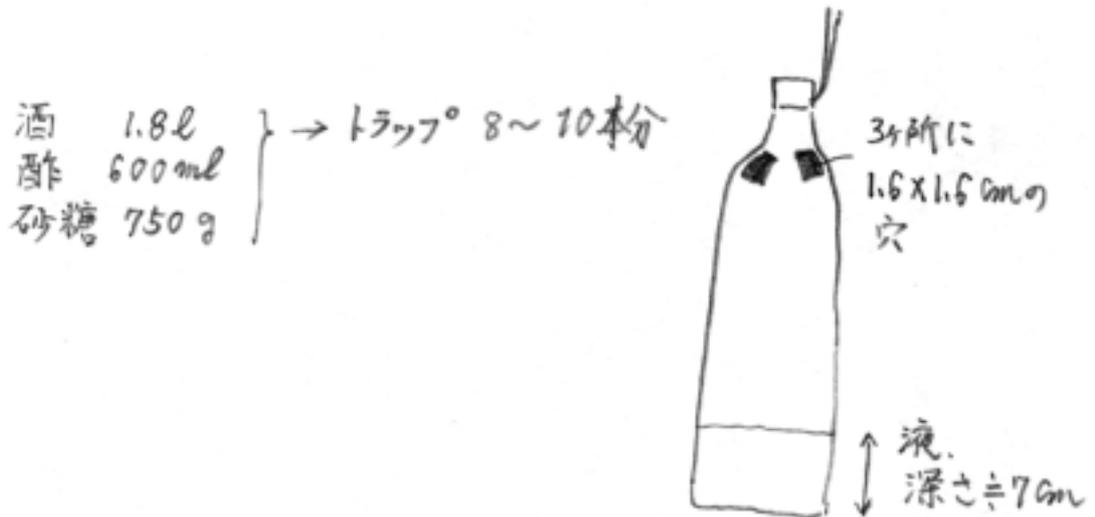
場 所 : 彦根市稲部町、住宅地内自宅庭。(30 5236-6145)

期 間 : 夜間のみ、Ju1y/06/2006(thu) ~ Ju1y/08/2006(Sat)

* どの様な内訳で、問題のある昆虫はいないですか？

* 採れた力は ばかりではないですか？

普通、暗闇出行動するように思われる力がなぜ青い蛍光に誘引されるのですか？



済みませんが、返答頂きましたら、フィールドレポーターの投稿に回して下さい。

表 題 【ヨシ笛コンサートとヨシのお話を聴きました】

投稿日【061022】

名前【草津市 古谷 善彦】

琵琶湖博物館開館 10 周年の記念イベントが引き続き 10 月 21 日(土)・22 日(日)も館内のあちこちで、にぎやか盛大に開催されていました。

フィールドレポーター定例会はその交流事業参加に合わせて、日時を繰り下げ 22 日の午後 3 時半からとなり、各自思い思いに会場を巡り、チラシに掲載されていたとおり「琵琶湖博物館で楽しもう」を名実ともに楽しんだ 1 日でした。

交流事業参加団体の活動を紹介するパネルなどの催しでは、それらの全部を見て廻るには、やや時間不足の駆け足ながらも、午後からの「ヨシ笛コンサート」は開演直後から拝見することができました。

プログラムの「守山びわこヨシ笛アンサンブル」には間に合いませんでしたが「ヨシの風 TUGUMI」によるヨシ笛の演奏にはその音色に力強さを感じ、久々に見る紙芝居の新鮮さに浸り、ヨシ笛と併せた音楽紙芝居の構成でヨシをテーマに水辺の環境保全をやさしいナレーションで訴えられていました。

続いて「ヨシに関するお話」は、お国自慢を交えて近江八幡市西の湖出身で現在も在住の西山嘉廣さん(ヨシ笛研究所)と小山弘道さん(鵜殿ヨシ原研究所)のお二人が進行役である館の布谷さんのやさしい話術で、ヨシの存在意義を整然と分かりやすくしかも面白く話されたその内容は、ヨシによる水質浄化、環境改善、生物の多様性の問題などを挙げられ、長年ヨシの現場に携わってこられた豊富な経験と実績から自然環境の大切さを訴えるものでした。

西山さんは西の湖のヨシで生計を立てる家庭に生まれ、今日まで多くのヨシに関する論文を集めておられ、世界中のヨシに関する論文は全部収集すると熱く語られていました。(ヨシが消滅するとオオヨシキリは来ないかも?)

小山さんは高槻市域の淀川右岸に長さ 2,5km、面積にすると甲子園の 18 倍のヨシ原がありこれを「鵜殿のヨシ原」と言い鵜殿ヨシ原研究所を立ち上げてボランティアとともに保全活動などをされているそうです。

ヨシは古来、量的には家屋の屋根材として多量に用いられたが燃えやすいことから法律で原則使用禁止となり、ヨシズなどは安い輸入品に頼り、国内では僅かにちまきを包む葉っぱとして利用するくらいであるが、ヨシが水中からリンや窒素を吸い上げて水質をよくしていることを知って欲しいし、ヨシの葉で包んだちまきをどんどん食べて環境改善に協力してください・・・と。

又、ヨシの量的活用法として葦紙(ヨシカミ)を開発して多用途に利用できるように製品化し商品としてヨシワークショップで販売もされていました。

「鵜殿の葦紙」と言うそうです。『ヨシの人生 枯れても 紙になる』と。

フィールド・レポーター12月・1月・2月予定

次のとおり計画しておりますので皆さんご予定、ご参加お願いいたします。

なお、稀に予定が変更になる場合がありますのでご了承ください。

日 時	内 容	場 所
12月02日 (土) 13:30～17:00	定例会	琵琶湖博物館交流室
12月16日 (土) 13:30～17:00	定例会	琵琶湖博物館交流室
1月06日 (土) 13:30～17:00	定例会	琵琶湖博物館交流室
1月20日 (土) 10:00～17:00	定例会(掲示板発送)	琵琶湖博物館交流室
2月03日 (土) 13:30～17:00	定例会	琵琶湖博物館交流室
2月17日 (土) 13:30～17:00	定例会	琵琶湖博物館交流室

〈フィールド・レポーター・スタッフから編集を終えて〉

今年の紅葉前線は約10日位遅れているようで、京都のモミジも名所は12月初めまで楽しめるということのようです。また、湖西の山、湖東の山と山歩きがとても楽しい時です。でも、森の木の実や食べ物が少ないのか、滋賀県内でも里山で熊に遭遇したというニュースがたびたび報告されています。そう言えば一昨年も同じように熊の被害が出て山の入口に注意看板を多く見かけたことを思い出しました。木の実の生り年が隔年に来るということでしょうか。注意事項を守って山歩きを楽しみます。

オオヨシキリの鳴き声観察は楽しんでいただきましたでしょうか？ 今度の冬の調査は「ミノムシ」です。枯れ枝に下がったミノムシをできるだけ多くの方に見つけていただきたいと思います。ぜひ調査票をお送り下さい。また掲示板にも、皆さんのご投稿をお待ちしております。

(担当 FRS 椋島 昭紘)



掲示板



2006年度（2月）第5号 通巻第44号

琵琶湖は未知の原生動物の宝庫

フィールドレポーター担当
楠岡 泰

2006年秋、日本原生動物学会がオーストリア・ザルツブルグ大学のフォイスナー教授を日本に招待しました。フォイスナーさんは原生動物(原生生物)、繊毛虫類(ゾウリムシの仲間)の分類の世界的権威です。

来日するという情報を得て、さっそくフォイスナーさんにメールを出し、琵琶湖に来てみませんかと招待しました。ちょうど、彼も日本に行く機会があれば、琵琶湖で調査してみたいと思っていたそうで、話はとんとん拍子にまとまり、忙しいスケジュールの中、琵琶湖に6日間ほど滞在していただきました。その間、琵琶湖で調査をしたり、研究室でサンプルを解析したり、日本の若手研究者向けの繊毛虫の同定法のワークショップも博物館で開いていただきました。

ワークショップの折、ある大学院生が、自分が持ってきた繊毛虫をフォイスナーさんに見せて、同定(生物の名前を判定する)をお願いしましたが、フォイスナーさんは、属レベル(同じ分類学的特長をもった種のみ)：たとえば、イヌとオオカミは同じ *Canis* 属である)まで同定しても、種レベルまでは同定しませんでした。フォイスナーさんでさえも、よほど特徴的な種でない限り、その種を記載した原論文と比較しなければ、種まで同定できないからです。

通常、私たちはある生物の名前を調べるのに図鑑を使い、分類の専門家でもない限り記載論文にあたることはありません。原生動物の場合も図鑑はあるのですが、属レベルの同定にしか役に立ちません。原生動物はあまりにも多様で、すべての種が載っている図鑑がないためです。たとえば、よく池や川で見かけるツリガネムシでも通常の図鑑には数種しか載っていません。実際にはツリガネムシ属(*Vorticella*)だけでも海外からは200種以上報告されています。そして、厄介なのは原生動物の多くの種がコスモポリタン(世界中に分布する)な種であるため、たとえば、アフリカで記載された種が日本で見つかる可能性もあるのです。よって、あるグループを種まで同定する場合は、そのグループに関する世界中の記載情報を手元においておく必要があります。また、もし、すべての記載情報が手元にあり、自分が調べている種がどの記載とも合致しなければ、その種を新種として記載することができます。フォイスナーさんはこれまでに新種を2000種以上記載しているそうです。

帰国後、フォイスナーさんから電子メールで、今回の琵琶湖調査で4種新しい種を見つけたとの報告をいただきました。そのうちの1種は近年アフリカで記載された新属に属する新種だそうです。

琵琶湖には未知の原生動物がまだまだたくさん生息していると思われます。皆様も新種を探してみたいかがでしょうか。



図．ツリガネムシの一種

秋山 廣光さん(水族病理学専攻)

守山市 森 擴之



魚たちの恋の大合唱に魅せられて

ご自身のプロフィールについて

静岡県ご出身の当年 55 歳。現在は奥様のほか、大学生、高校生の息子さん 2 人を含め 4 人暮らし。大津市田上に居を構えておられます。

博物館への通勤はマイカーであるが、これがまた一苦労。瀬田の唐橋を渡るのに要する時間の不確定さに閉口している毎日とか。

琵琶湖博物館でのご担当の「水族病理学」について

一応そう言うことになっているが、実際にはその他の業務に追われて、実務的な病理学の研究は行っていない。

ただし、最近ではコイヘルペス、鮎の冷水病など問題になっている病気もあり、また、いつ何時外国からえたいの知れない病気が舞い込んでくるか判らない状況があるので、魚病学会とか他の水族館の人達と接触を図るなどして、常に情報収集には心がけている。

また、毎朝出勤後に当博物館の水族展示室を見回り、異常はないか確認作業を行うとともに、飼育担当職員からの病気の処置などの問いかけに適宜対処することが日課となっている。

今ご興味をお持ちの、魚の生態学、行動学に関して

琵琶湖博物館にくる前の任地である琵琶湖文化館時代に、展示水槽でズナガニゴイの産卵行動を頻りに観察する事が出来、これを数多くビデオに収録する事が出来た。

最近大阪教育大学の学生がズナガニゴイの産卵をテーマにした研究を



したいと言うことだったので、観察した産卵行動について話をし、ビデオも見せたのだが、学生さんの言うには、自然環境化では、このような産卵行動はなかなか観察されないとのことだった。

この魚は非常に神経質な性質を持っており、自然環境下では観察者などが近づくとすぐに逃げてしまい、彼らの行動を観察する事がなかなか難しい。ところが展示水槽では、観察者が近づくと慣れていたたり、水槽内と



いうこともあり狭いので、幸いにしてこのような産卵行動が観察できたものと思う。

同様な例をもう一つ紹介すると、自宅の水槽で飼育中のヤリタナゴのメスが縄張りを張り、他のオスを追い払う行動を示したり、ゲンゴロウブナが同じような行動を示したりする事が観察された。このような行動は自然ではまず見られない。

彼ら(魚たち)は本質的にこのような行動を行う能力を持っているが、自然環境下では必要ないから、このような行動を起こさないだけで、飼育水槽など特殊な環境下では必要に迫られて、その能力を発揮するのではなからうか。



魚の発音機構について

魚たちの発音行動については、「音を出しているわい」といった程度で、「それをどう使っているのか」などといったことはあまり研究されていない。

そこで、琵琶湖博物館への転勤を機に、研究テーマとして取り上げてみたものの、これがまた難物で、彼らの声(音)を記録することの難しさは想像を絶するものがあった。

水中で音を拾うわけだから、水中マイクを使うのであるが、これが禁制品であり(軍事目的品目)簡単に入手できないことに加えて、水中では音の伝わりが非常によく、展示水槽などで使うと、雑音の多いこと、はなはだしく、床を伝わってくる機械設備の発する音、人の足音、扉の開け閉めの音あるいは人の話し声まで入ってきてしまう。

その上、通常の水中マイクでは、主に人間の可聴域の音を拾うように設計されており、それ以外の音は拾わないと言った問題も抱えている。さらに拾ってきた音を録音するシステムも人間の可聴域のみを扱うように設計されているなど難問山積である。そんな訳で、現在は研究活動がなかなか先に進まない状況にある。



しかし、ギギをはじめとした多くの魚たちは、主に産卵期に音を出しており、この音は彼らの「恋のささやき」、いや「恋の大合唱」ではないかと思われる。

流し網や延縄などの遠洋漁業の漁師達の話によると、エンジンを止めて、船底で寝ているときに魚群が船底近くを通り過ぎる時、ものすごい音が聞こえ、とても寝ているところではない、とのことである。「大合唱」そのものであるらしい。

現在の主な仕事である映像資料の保管管理について

現在琵琶湖博物館には15万枚以上の琵琶湖の風景・生活変遷・環境変化・災害・生物などに関する写真映像が収集されており、一部はデータベース化されており、魚類図鑑などの形でインターネット上に公開し多くの人々に利用されている。

しかし未整理のものも多々あり、今のうちにしっかりとした形で整理しておかないと後世に伝えられないと感じ、一昨年からこの映像資料の保存管理をメインに取り組

みだした。

この問題に取り組んで、痛切に感じたことは、映像資料を後世に残すためのメディアおよびシステムの問題である。デジタル全盛の現代、全ての映像資料がデジタル資料としてCDメディアなどに保管されている。これを映像化するためにはコンピューターが必須であるが、CDメディアの耐久性も含めて、これらのシステムが未来永劫変更されないと言う保証は何もない。システムの変更あるいはコンピューターのクラッシュが起こった場合、全ての記録が失われてしまうのではないかと危惧する。

デジタルカメラ全盛の時代ではあるが、映像は先ずフィルムで残す必要性を痛感する。フィルム映像があればいつでもデジタル化は可能である。

趣味の世界について

はじめは、魚の写真を撮ることであった。初めてカメラを買ったのも、魚を撮るのが目的だった。趣味が仕事になってしまったような感がある。

最近は精神科学・心霊の世界（Spiritualism）に強い興味をおぼえている。「人間の心・気持ち・精神力が物質の世界に影響を与えようと言うことが本当の事なのか」とか「生まれ変わり」とかあるいは「前世」とかいった多くの問題があり、なかなかためになる話も多い。たくさんの本を買い、読んでしまった。

座右の銘

「無知を恐れるなかれ、偽りの知識を恐れよ」（ソクラテス）

「知識には責任がある」（シルバー・バーチ）

推薦図書

エリザベス・キューブラーロス：「人生は廻る輪のように」(The Wheel of Life)

上野圭一 訳；角川書店（2001）

：「ライフ・レッスン」(Life lesson)

上野圭一 訳；角川文庫（2003）

フィールドレポーター活動について

いろいろな興味を引き出し、“楽しいなー”と思うことを実践したらよいのではないか。例えば、写真を撮ること。普段の何気ない日常生活の中で気の付いた事柄、風景などを一枚の写真として残すことは、20年、30年後には懐かしいものとなり、その一枚の写真から、話題が広がるとともに、後世の人々に残す大きな遺産となるでしょう。

インタビューより一言

どうもお忙しい中、長時間楽しいお話を有難うございました。

また改めて、スピリチュアリズムのお話など、拝聴できれば幸いに存じます。

以上

(魚の写真は琵琶湖博物館ホームページ電子図鑑より)

〔ギャラリー展示〕 企画展でふりかえる琵琶湖博物館の10年

(平成18年12月23日(土・祝)～平成19年2月18日(日)開催) FRスタッフ

フィールドレポーターコーナーも展示しております。発足当時のことから今日までの経歴表と関係された方々等から寄せられた一言を、ご紹介させていただいております。ぜひ琵琶湖博物館にも足を運んで展示をご覧いただき、みなさまの一言をお寄せ下さい。1月までに頂きました一言をここに、ご紹介させていただきます。

NHKラジオに「昼の憩い」という番組があり、そこで農事通信員が自分の地域の事柄をレポートするコーナーがありました。それがヒントとなり、この農事通信員のように自分の身近な事を自分たちで調べ、報告できないかと思ったのがフィールドレポーターの始まりです。

1人の学者が100ヶ所を調べるよりも、100人の人が1ヶ所ずつを調べる事に価値がある。つまり「1人のクロウトより100人のシロウト」、みんなで賢くなるうという想いがあります。

嘉田 由紀子

カマキリの卵のう調査

県内のカマキリの卵のう分布調査を1999年末にフィールドレポーターの調査テーマとして実施しましたが(結果は「昆虫と自然」12.2002に発表)、卵のうの中身はどうなっているんだろうという疑問からその切断調査に始まり、孵化から脱皮、交尾、産卵の飼育観察、そして越冬飼育の挑戦まで、博物館の指導協力のもとで行うことが出来ました。

写真1は、卵のうの縦横断面、写真2は肉片での餌づけに成功して2月6日まで越冬したオオカマキリの元気な様子です。

有田 重彦

開館2年目から参加。案山子、田んぼの生き物、お地蔵さんなど学芸員さんの指導で無我夢中に県内を走り回り調査した。

ズブの素人の私に調査ノウハウからデータの纏め方まで調査の基礎と楽しみ方をバッチリと教えてもらったと思う。特に田んぼのカブトエビ、ホウネンエビの不思議な世界に魅せられ、生涯のテーマとなっています。

現在うおの会調査活動や親子体験教室をしています、その原点、原動力になっています。

武田 繁

新しい行事もできて

「年中行事調査」のまとめを担当して、レポーターの住んでおられる所・年代と行事との相関が見えてきて興味がわいた。

湖北では地域の行事が多く伝承され、湖南の新興住宅地などではこれまで無かった「琵琶湖よし刈り」「震災の日」など新しい我が家の行事の創生があり、行事から見る湖国の今が楽しかった。

津田 國史

湖岸を渡る風もやさしく、水ぬるむ。

時は春、オオヨシキリの恋の季節が「行々子・行々子」の鳴き声で始まります。恋のさえずりは賑やかで、飛来調査には多くの報告をいただきました。

しかし夏休みも終わりの飛去調査では、「行々子」の鳴き声もしないヨシ原は虫の音や他の鳥の声が目立ち、オオヨシキリを確認するのが非常に難しくなりました。残暑が厳しい時の調査は楽ではなく多くのレポーターの皆さんもダウンされたようでした。

多胡 好武

フィールドレポーター調査への参加

フィールドレポーターに登録以来、毎回挑戦を心がけて来ましたが家事に追われて挫折ばかり……。調査結果報告者がうらやましかった。

1997年“あなたが使った水の量”の調査結果報告者のお話を聞く機会がありました。「この調査では、本当に疲れました。もうやりたくない気持ちです」という主旨のお話には感動しました。

“2001の私の選んだ21世紀に残したい湖国滋賀”

“2003我家、わが地域の年中行事”

などは家族と話し合い、色々とり上げ乍ら、結果報告を出せなかったのが心残りです。

杉江 ミサ子

エドヒガン調査

2005年エドヒガンの調査は、思い出深い調査でした。

今津の箱館山スキー場入口のおそば屋さんのお駐車場にあるのがエドヒガン。今津の自然観察クラブの方々が、町内にあるエドヒガンに札をつけて下さっていました。今津にこれだけあるのだから、きっと、私の住んでいる志賀町（今の津市）にも、たくさんあるだろう……。御近所の方々もまき込んで、桜さがし……。探せど探せど（笑）今まで、桜と言えば、ソメイヨシノだと思っていたけど、桜を見る眼が私にも備わった。春の山の中にポツンと咲いている山桜が美しいと感じるようになった。京都の庭師、佐野さんのファンになった。私にとっては、いい調査だった。

奥村 恵美子

ヘチマの味

五個荘町との交流会で初めて、ヘチマの使い道は、タワシや化粧水だけでなく食べられるとも教えられて、どんな味？と期待が高まる。

長さ20cmくらいの繊維がやわらかいヘチマを選んで皮をむいて調理する。ナスのような食感で、田楽や味噌汁・天ぷらにして楽しんだ。

フィリピンでは甘味のある十角ヘチマが市場に並ぶらしい。さまざまな体験が出来るのもフィールドレポーターだからだと思う。

山崎 千晶

ガマの栄衰

「水辺の消失や改修で、ガマの生育地が狭められている」というレポーターの投稿がきっかけでガマ、ヒメガマ、コガマの3種のガマ類が、どこのだんな場所に生息するかを調査しました。

湿地の埋め立てなどで、ガマの姿が消えた場所もありました。けれども休耕田や新設の新草津川にいち早く入り込んで大きな群落を作ったり、水路のわずかな土砂に生えたりと、パイオニアとしてのガマ類の姿が浮かび上がりました。また自然が豊かな地域だけでなく、市街地や住宅地にも見られて、街の小さな自然を再認識しました。

前田 雅子

猿も去る？

雀は稲の実る前の柔らかい実を食べに来ると教えられた。早くから案山子が立っていたのでそんなに早く？と、田んぼの持ち主に聞いたところ、結実する前のまだ柔らかく汁気の多い実を好んで食べに来るので、早くから案山子が必要なのだと教わった。

湖北の芋畑では猿対策に女性マネキンを立てたのがあり案山子の職域拡張・労働強化が始まっていた。

津田 國史

2002年のタンポポ調査がフィールドレポーターの始まりでした。子供の頃の気持ちになって夢中に野原を歩きました。今まで何気なく眺めていたタンポポ。このときからタンポポに種類があって形も色も、在来種も外来種も、そしてこれらの交配種も、と興味は広がって、旅行先に行ってタンポポを見ると覗き込んで細かく見る楽しみができました。そして今まで4年間、毎年の調査を楽しんでいます。

椋島昭紘

2005年の「第2回夏のセミの調査」(初めての参加)

子供のころ、夏になると近所の桜の古木でジャンジャンとやかましく鳴いていたクマゼミ。とりもちで追いかけたことがなつかしく思い出されます。それからすっかり忘れていたセミ、今回はそのクマゼミの分布に力を入れるとのことでした。日本には32種のセミが分布していると聞いてびっくりしましたが、調査に参加して判ったのは、クマゼミ、アブラゼミ、ヒグラシくらいでした。

田村健太郎

案山子

今調査は当時私は野洲町に住んでいて、調査ではこのあたりの農家の人はほとんど「人がたの案山子」は設置していないという結果でした。多くがぴかぴかのテープとか網とかでした。しかしその翌年越してきた甲賀町の田んぼでは、うって変わって人がたの案山子が多く、とてもユーモラスなものもあり、「うーんどうしてこの調査が去年だったんだ。惜しい」と思いました。

井野勝行

夏のセミ

ニイニゼミは必ず毎年7月に入ってから、ツクツクボウシは必ず夏休みの後半に入ってから、ハルゼミは初夏の芽吹きが一段落した頃・・・とでもそれ以来ガマが目につくようになり、よく見ていくと、他にも、自分の町内にももっとたくさん生えているところあるとわかった。博物館の調査時よりも、そのあとのほうがよくガマのことがわかるようになった。 うーんこれって嬉しいような申し訳ないような。

井野 勝行

この調査にはこんなことがあった。

ツバメの巣を調べよう

毎年ツバメが飛来する友人に家で、調査させて頂きました。幼少の頃、自宅にツバメの赤ちゃんが大きな口を開けて、餌をおねだりしているのを思い出し、友人と話をしながら見ていました。その友人も重い病気で亡くなり、もう5年になります、ツバメを見ると思い出します。

調査の期間を過ぎても季節になると気になります。

ホタル

ホタルダスを初めから終わりまで調査を致しました。今でも6月頃になると、調査をした筏川に行きます、ただ三面張りのコンクリートになり時代の移り変わりを感じています。

雲川 弘子

ガマ

ガマの穂は、この調査をする前まであまり目にとめていなくて、調査してみると自分の町内に少なく、となりの町でよく目に付いた。身だからその時はちょっとがっかりしていた。でもそれ以来ガマが目につくようになり、よく見ていくと、他にも、自分の町内にももっとたくさん生えているところあるとわかった。博物館の調査時よりも、そのあとのほうがよくガマのことがわかるようになった。 うーんこれって嬉しいような申し訳ないような。

井野 勝行

タンポポ

一回目の調査では白花タンポポの多さと赤実タンポポが微妙に他の西洋タンポポと大きさがちがうことを初めて知りました。2回目の調査では「中間種」「あいの子」「混血児」のタンポポがとても多いことに驚きました。「生物は皆長い進化の過程を経て現在に至っている。」と、よく言われますが、それはすなわち「そして現代はその進化が一段落していて、もう進化は起こらなくなった。」のではなく、今も交雑・取捨選択が続いている途中なのだ、と気づかされます。

井野勝行

調査の思い出 「2000年 田んぼの生き物調査2」

湖西から湖北にかけて車数台で、順番にポイントを調べに行きました。高島市の田んぼの水は琵琶湖からポンプアップされていて、そこにはヒルとオタマジャクシ以外には、何も発見できませんでした。アメリカではヒルの吸血能力を医学に利用されているとグライガーさんから教えて頂きました。

京 美季男

‘98年の「お雑煮」からフィールドレポーターの一員にさせていただきました。身近な調査がお役に立てることは、家庭人にとって大きな喜びです。今年は家庭の事情で休んでおりますが、“フィールドレポーターだより”を楽しみに読み、参加できる日を心待ちしています。

‘01年の「へちまクラブ」私にとって大変嬉しい調査でした。現在も長浜市びわ地区では、その活動が続いています。タワシ、へちまコロンは日常欠かせない作物です。重宝しています。

梶本さつき

FRとして登録する前のタンポポ調査から博物館とのおつき合いが始まりました。だからやっぱりタンポポ調査は思い出一杯です。10年前には新草津川もなく休耕田が一杯で犬の遊び場でした。そこで見つけたタンポポ、在来種が一杯。白花タンポポもあり春の花でした。

今では1年中咲いています。川の堤防、家、道路沿いのアスファルトの境目、これほどの種類かとやっぱり見えています。

町内を流れる郡上川にあれだけいたゲンジボタルも昨年、今年と1匹も見つけれませんでした。季節は巡って来るのに寂しいことこの上なしです。

環境の変化の大きさは、身近な生物が存続できる空間を奪ってしまいました。それでも、かかわったそれぞれのテーマがその季節になると思い出され、お蔭様で私の生活にはずみをつけてくれます。

大いに楽しませて頂いているFRです。本当はもっと交流会にも出席しないと思ってはいるのですが……。ミノムシ見つかりません。

草津 小林

FR活動を通じて、様々な生物の存在を知ることができました。

特に、身近な鳥調べでは、県鳥なのに私がカイツブリを知らなくて、ましてや川にまでいることなどつゆ知らず、近くの川で見かける、すぐに潜ってしまう、全然飛び立たない、小さい鳥をカイツブリと判断するのに1ヶ月以上要した。川底を潜水泳法で逃げていく後姿思い出しますね。

それから、ホタルの調査時に、知事になられた嘉田さんが詳細の聞き取りに自宅まで電話を下されたことを懐かしく思い出されます。

土田 正文

掲示板通巻第43号の加固さんの「トラップと電撃捕虫器」についてご質問への
学芸員さんからのご回答

掲示板前回号（'06年11月発行）の加固さん投稿「トラップと電撃捕虫器のゲーム」から、A) ペットボトルトラップ、B) 電撃蚊取り器のことについての質問がありました。その質問に八尋学芸員・榊永学芸員からご回答を頂きました。加固さんからのご提案で回答は掲示板でご紹介下さいとのことでしたのでご紹介します。

A) ペットボトルトラップ

【質問】スズメバチ対策に仕掛けたものですが、どのような内訳で、問題のある昆虫はいないですか？

【八尋さんからご回答】ハエ、ハチ、ガ、コガネムシ類などの飛翔性の昆虫が多く捕獲されると思います。スズメバチ以外には問題のある昆虫はいないと思います。どの分類群がどれだけの内訳で捕獲されるのかの詳しい内訳のデータはないと思います。調べられてはいかがでしょうか。

【質問】 入り口の穴より大きそうな「ガ」が見受けられるのですが、不思議はないのですか？

【八尋さんからご回答】「ガ」が液にふれると翅が広がった状態になり、これがよく穴から入ったと思われるかもしれません。しかし、実際にガがトラップに入る時は翅を閉じて入りますので、体と翅を閉じただけの穴の大きさがあれば入れると思います。

B) 電撃蚊取り器

【質問】 どのような内訳で問題のある昆虫はいないですか？

【八尋さんからご回答】これも飛翔性の昆虫が多く捕獲されると思います。電撃蚊取り器が設置されている環境によって内訳は変わってくるものと思われます。1997年の7月から1998年12月までに下物の水田で私が行った誘蛾灯による定期定量調査では、コウチュウ目27科146種13,547個体、チョウ目10科65種4,760個体、カメムシ目11科25種7,920個体、バッタ目3科6種67個体、ハエ目1科2種26,713個体、ハチ目2科3種26個体、トンボ目1科1種1個体、トビケラ目1科1種197個体、アミメカゲロウ目1科1種10個体の計9目57科250種52,964個体が捕獲されました。

目別の捕獲割合はハエ目が最も多く51%、コウチュウ目が25%、カメムシ目が15%、チョウ目が9%で、その他の目は1%以下でした。目別の種数割合はコウチュウ目が最も多く59%、次にチョウ目が27%、カメムシ目が10%、バッタ目が2%でした。なお、この調査は誘蛾灯によるもので電撃蚊取り器の青い蛍光灯ではありません。

【質問】 とれたカはオスばかりではないですか？普通、暗闇出行動するようにおもわれる力がなぜ青い蛍光に誘因されるのですか？

【梶永さんからのご回答】これは昆虫の走行性反応を利用したもので、雌雄どちらも捕獲されていると思います。古くは、日本でも江戸時代の松明による虫の火送りなどに起源し、近代では、より効率的に虫を集められる光を研究した成果の一つが紫外線でした。カのおスばかり集まるトラップとしては、メスの羽音に引き寄せられるオスの習性を利用した音波トラップがあります。

以上

図 掲示板通巻第43号のペットボトルトラップ

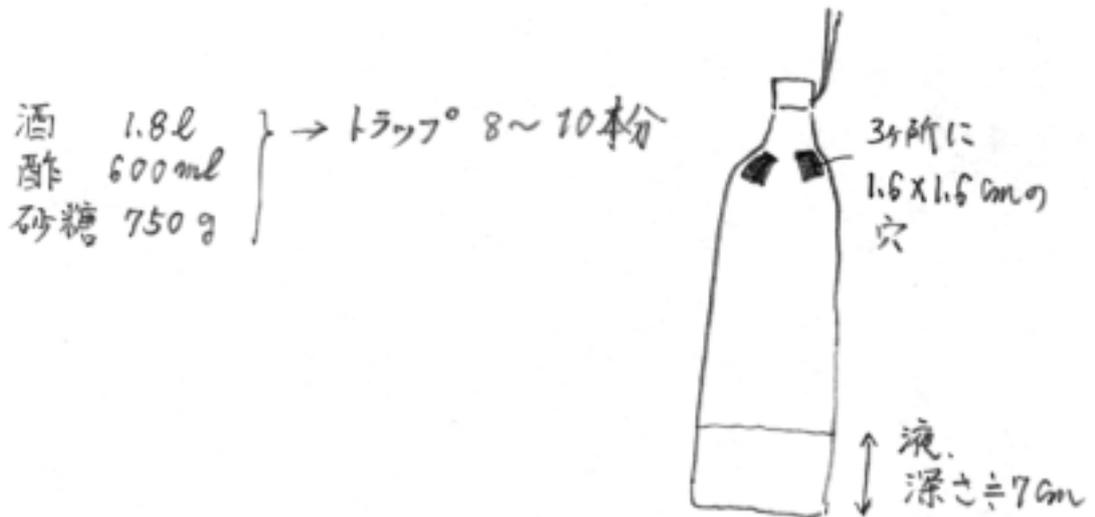


表 題【ミノムシ調査探訪記】

投稿日【070109】

名前 【草津市 古谷 善彦】

昨年 11 月 20 日から始まった『身のまわりの自然』ミノムシ調査、イメージでは見慣れたもので日常生活環境の中で簡単に見つかる・・・と考えていたが現実は何と生活圏ではまったく見られず、そんなに単純なものではないことが分かった。

こんなところにも自然環境の変化がミノムシにも及んでいるのか？と、調査の対象になったことがきっかけで改めて感じた。

調査が始まってから発見できないまま 1 ヶ月が経過し、年の瀬も押し迫ったある日、ひとりの FR スタッフの方から「ここにいるよ」と 1 本の木に多数のミノムシがあるのを見て何としても探し出したいと発奮した。

一念発起、早々と元日の夕方には三が日の予定を急遽変更して、翌 2 日に「ミノムシ調査」に出かけることにした。

行き先は過去の調査で度々訪れている湖西の今津からマキノ高原である。朝からの雨は止みそうになかったのに今考えてみると、ただひたすらに行くということだけしか頭になかったようである。

ところが、湖西の国道 161 号を北上して行くと比良あたりでは小雨となり、今津では道路も乾いていて雨の気配すらも無い。

まずは貫川内湖の北湖周辺を調査、車を止めたあたりは内湖に沿った柳並木で細い枝が垂れ下がり如何にもミノムシが居そうな雰囲気なのに居ない。釣りをしている人も居て曇り空だが寒さの実感がないのでありがたかった。

北湖を半周したあたりでやっと待望のミノムシを発見、たかがミノムシかも知れないが、やった！！・・・と身体が熱くなった。まだそんな熱意があったのか??? まずはデジカメに収め、採取しようと思ったら手が届かない、落ちていた二股の枯れ枝で振り落とそうとしたが木から枝折れしてくれない。3 回目にミノムシの付いた枝が折れた！と思った瞬間、その枝は勢いよく内湖の水面に飛んで行った。どこかのタレントの持ちネタではないが**残念！！**

幸いにもその先の木にもミノムシが見つかりその木の下にも大きなカラのミノムシを見つけ標本採取第 1 号となった。



貫川内湖で見つけたチャミノガ

そのあと、箱館山方面へ車を走らせセミの調査などで訪れた酒波寺周辺とその前の日置神社境内を調査したが発見出来ず。この辺りは年末の雪が残る銀世界で舗装されているもみじ池への道路は閉鎖されて雪解け水が流れていた。

3 ヲ所目は今津総合運動公園へ、ここは 3 日まで閉館で駐車場へも入れない。入り口には「監視カメラ作動中」の看板があった。車を止めて公園内に目を向けると老夫婦と思われる二人連れが歩いているのではないかと、しばらく見ていると集落から中年の二人連れが犬を連れて細い道を公園に入って行った。

それならば、と監視カメラを見上げながら細い道をデジカメ下げて駐車場へ進入 1 本の木にチャミノガを発見、採取して雪の上に置き収録し、後日雪の上ではどんなに写っているのかと見たら、なに～？その画像が無い！（大切なものは先ず確認やなぁ「後悔先に立たず」とはこの事や、又も残念！！）

続いてマキノへ、道路に雪はまったく無いが栗園や田畑などはほぼ一面真白い雪景色で、天高くそびえ立つメタセコイアは圧巻だった。かつての韓国ドラマ「冬のソナタ」でこのメタセコイアも有名になり、たくさんの人が訪れたと聞いたことがあるが今はもう昔の話なのだろうか。だが季節ごとに表情を変えるメタセコイアはすばらしいと思う。その表情をカメラに収めてマキノピクランドの表周辺を調査、この栗の木には居るのではないかと淡い期待を持っていた。その駐車場近くの植木で難なく発見。記録メディアは余裕があるのに惜しいことにまさかの電池切れ、補充は持ち合わせていなかったのここから後は画像記録に残せなかった。

最後はマキノスキー場へ、この時期は雪があって駐車は手前の方になるのにゲレンデは芝生が丸見えでスキー不可能、人出も店も閑古鳥、幸いといったら勝手だけれど温泉「さらさ」のすぐ近くに駐車できた。しかし、雪不足で寂しいゲレンデは雪頼みの地元経済の痛手は大変だなぁと思い、自然は人間社会の盛衰をいとも簡単に変えることが出来ることを思い知らされた感じだった。

時刻はまだ午後 4 時に少し前、のんびりとスキー場の周囲を散策しながら余裕の調査、かじか橋のたもとの 1 本の雑木でミノムシを発見して採取した。

メッシュの 4 コマで成果を得たのでのんびりと温泉に浸かり身体を温めた。

行き帰りとも渋滞は無く、雨にも降られずゆったりとした気分での今日のミノムシ調査を終えたが、願わくば今年もよい年でありますように！！

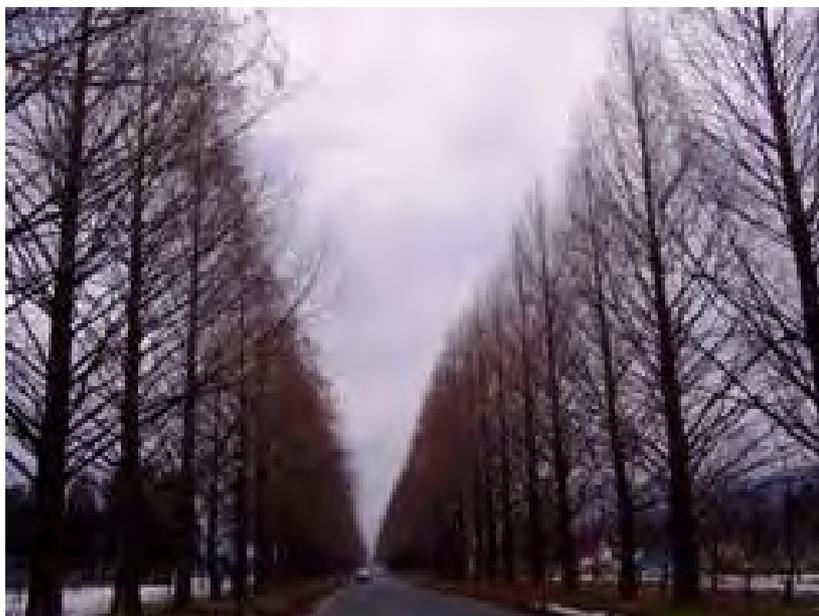


表 題 [野生の川魚・海水魚を飼って見ませんか]

投 稿 日 [0 6 1 1 2 3]

名前 [彦根市 加固啓英]

随分昔に何度か錦鯉や金魚、エンゼルフィッシュ、ネオンテトラ、グッピー、等は飼ったことが有るのですが、近年身近な野生の魚を飼って、この方が手間も掛からず、数段面白く、珍発見も多いことを知りました。今は川魚を飼っていますが、この面白さを皆様にも知って頂きたく、投稿します。

[川魚]

J R 稲枝駅を挟むように流れる愛知川、宇曾川、と同駅の西側の水田の農業用水路から捕ってきた、タモロコ、ハゼ類、コイ、フナ類、タナゴ類、メダカ、ヒメタニシ（ガラスの掃除屋さん）等 25 尾程を全部一緒に 60 cm、の玄関の下駄箱の上の水槽で水深 20 cm ほどにして飼っています。

エア・レシオ、フィルター、ヒーター、等は全く使用せず、河原の礫と水草を添えただけで充分健康に飼えるようです。水草を沢山入れておけばメダカの繁殖は容易です。

水の汚れが目立ったときに、容器に水を汲み上げ、勢いよく注ぎ、底の汚れを巻き上げて、全量の 1 / 3 程を汲み捨て、汲み置きの水で（私は冷えた風呂の残り水を使用）元のレベルまで補います。

その間、魚達は礫の影に身を隠しており、全く問題有りません。

餌は D I Y 店で買ってきた、乾燥ミミズ・乾燥イトミミズ・メダカの餌・川魚の餌、等ですが、1 パックの量が 10 年分も有りそうで、又、魚を飼うのをやめた人が次々に持ってきてくれるので、だんだん増え続けています。

捕り方は、云わば物臭漁方。流れの岸から百円均一ショップの魚・昆虫兼用の目の細かい「玉網」で掬うだけです。

川岸で水面下を目を凝らして見ているとボウフラより小さい、折れたシャープペンシルの芯の様な稚魚の群れがいくつも通り過ぎますが、これは狙い目、大当たりの見つけ物です。この正体不明の小さな生命体は 2 ~ 3 ヶ月すると若い魚となって素性が分かる楽しみがあります。

これとは別の、アルミ箔の碎片のような正体も区別も不明の稚魚は、フナ類とタナゴ類に成長しました。異なった場所から採取した同種の魚も、半日ほど後には一つの群れに合併吸収されます。つまり、1 つの群れでも血族集団とは言い切れないのです。

一つ分からないのは、私は毎回、餌を前面のガラスから離れた奥の壁際に撒くのですが、人が近づくと魚達はなぜか前面のガラスに押し寄せます。

[海水魚]

若狭湾の埠頭で釣れた外道の雑魚達で、普通は捨てるかりリリースする分を持ち帰ったものです。

容器に海水を入れ、更にその中に釣れた生きた魚と海水を入れたポリ袋を入れると車の揺れに耐えて、持ち帰れる事が多い様です。

ペットショップで売っている「人工海水の元」が必要ですが、水質を安定させるにはサンゴ砂（小粒なサンゴの碎片）を30%ほど混ぜた、よく水洗した川砂を水槽の底に敷くことをお勧めします。

もし最小目盛り0.1gの秤と、試薬の手入れ先があれば、主成分の調味料の食塩と少量の試薬の無機塩類で非常に安価に人工海水が作れる筈です。

エア・レシオとフィルターは必要です。

潮溜まりでも生き抜く連中ですから温度管理は不要のようです。

餌は海釣りの餌の残りを生餌か冷凍にした物です。

以前に海水魚を飼うのを止めて、湿った砂が残ったまま数年間放置した水槽の底にゴカイが生き残っていたのに驚いたことが有ります。

断然面白いのがクサフグです。

驚くと一瞬にして砂に潜ってしまい、その腹以外の皮膚の色と白い斑点はサンゴ砂混じりの砂とそっくりで、よく探すと緑色の目玉だけが砂の中に光っているのです。

この死骸は、猫などが食べる恐れから、充分深く掘った穴に埋めなければなりません。

色や模様の面白いハゼ類の魚が何種類か釣れます。

大きな背鰭を広げると意表をついたデザインの斑点などが有ったりします。

石の下等に入ると重力方向でなく、体の触れる壁状の物に腹が接する姿勢をとるのもハゼの仲間の習性の面白さです。

10cm程のクロダイは興奮の程度や個体間の順位で縞模様が刻々変わり、個体識別は出来ませんでした。これは川魚のタモロコ等、多くの魚でも同じです。

クロダイの子供達は際限なく突付き合い、結果は「そして誰もいなくなった」状態でした。

生きて持ち帰れば飼って見たい海水魚にヒイラギが有ります。

多分乾電池で動くエア・ポンプがあれば持ち帰ることも出来そうに思われます。

しかしヌルヌルな液にまみれて、あまり手に取りたくは無いです。

次々に釣れる魚で、口から長さが4cmほどありそうなポリエステルの蛇腹風の唇が伸び、多分底の泥の中から吸い込むように採餌するのだらうと思います。

又、発光バクテリアの寄生による発光器官があり、音を出す魚としても知られています。

地方によって「食べられない外道」であったり「旨い魚」であったりと、評価はまちまちの様です。

平凡社・世界大百科事典によると、地方名がギチ、ゲドウ、ギラ、エノハ、ギユウギユウ、グイグイ、ニイラギ、ネコクワズ、ネコナカセ、ネコゴロシ、ニロギ、シイノフタ、と盛り沢山です。

表 題【切断された旧草津川堤防の断面】

投稿日【061224】

名前【草津市 久保 穂子】

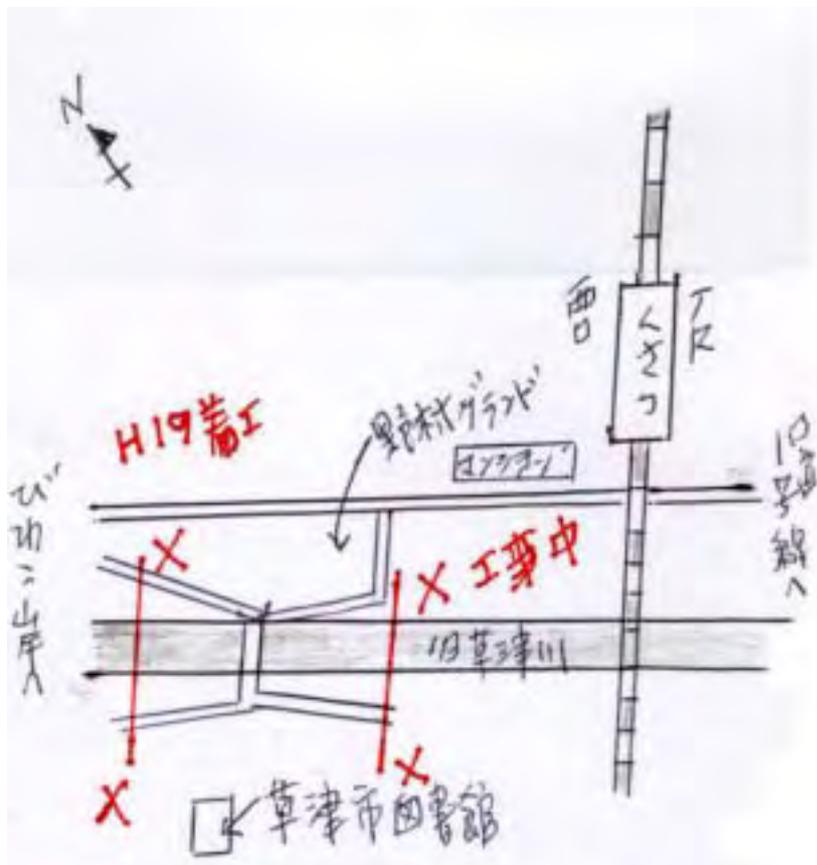
一級河川だった旧草津川（天井川）がH18年夏から、JR草津駅のトンネルから下流1000Mのところまで道路工事によって、江戸時代のはじめ頃に上流からの土砂が積もって現在の天井川になったといわれている。

工事中で切断ヶ所150Mぐらいのところは無用の者立入禁止で川の断面すら写真撮影出来なかったが、遠くから見ていると、上流から流れた砂の層と下部の土の色とがちがう。

平成19年になるとさらに下流の砂川大橋（湖南幹線道路近江大橋から守山へ）の道路が4車線になるので、ここでも切断されて天井川の断面がはっきりする。

切断部分で生じた残土は上流へ運ばれて天井川そのものが平面化されつつある。

将来計画は道路か公園化か、江戸時代からのさくらの名所草津川の堤防も消える。



「掲示板」および「フィールドレポーターだより」

ホームページへの掲載について

フィールドレポーターが定期的に発行し、宅配便でお届けしてきました「掲示板」および「フィールドレポーターだより」について、この度、琵琶湖博物館のホームページ上に掲載して頂きました。

現時点では、「掲示板」は2003年(通巻25号)、「フィールドレポーターだより」は2001年の「私の選んだ21世紀に残したい湖国滋賀」(通巻13号)以降の全てについて全文をご覧頂けます。

ただし、全文をご覧頂くためには、お手持ちのパソコンにアドビリーダー(Adobe Reader)がインストールされている必要があります。

下記の手順でアクセスして下さい。

<http://www.lbm.go.jp/index.html> (琵琶湖博物館ホームページ)



人ネットワーク



フィールドレポーター

なお、アドビリーダーがインストールされていない場合は、下記 Adobe 社ホームページから無償でダウンロード出来ます。

<http://www.adobe.com/jp/products/acrobat/readstep2.html>

以上

フィールドレポーター・スタッフ (FRS)

表題	担当	頁	表題	担当	頁
* 琵琶湖は未知原生動物の宝庫	楠岡 泰	1	* 野生の海・川魚飼育	加固啓英	14:15
* 学芸員紹介	森 擴之	2:4	* 切断された旧草津川	久保穂子	16
* 10周年キヤリ-展紹介	スタッフ	5:9	* 掲示板・FR 便りHPup	スタッフ	17
* 加固さん質問に学芸員回答	八尋・榊永	10:11	* もくじ・編集後記	スタッフ	18
* ミノムシ調査探訪記	古谷善彦	12:13	*		

フィールド・レポーター2月・3月・4月予定

次のとおり計画しておりますので皆さんご予定、ご参加お願いいたします。

なお、稀に予定が変更になる場合がありますのでご了承ください。

日 時	内 容	場 所
2月17日(土)13:30～17:00	定例会（研究発表会へ参加、翌日の交流会準備）	博物館ホール 交流室
2月18日(日)	伊丹昆虫館と交流（別途案内）	伊丹昆虫館
3月03日(土)13:30～17:00	定例会	博物館交流室
3月17日(土)13:30～17:00	定例会	博物館交流室
4月07日(土)13:30～17:00	定例会	博物館交流室

（おことわり；上表の博物館とは琵琶湖博物館のことです。）

〈フィールド・レポーター・スタッフから編集を終えて〉

10周年に当りフィールドレポーターの発足から発展にご苦労なされた方々の一言を読んで、あらためて湖東、湖西、湖南、湖北の情報交換の楽しみや大切さを思いました。掲示板もそういう皆さんが暮らして感じてくれた旬の一言を集めて作れたら...と考えます。ぜひ投稿用紙に一言書いてをお寄せ下さい。もちろん電子メールも下のアドレスにお寄せ下さい。お待ちしております。

（担当 FRS 椋島昭紘）

